大正九年十月一日(第三種郵便物認可)
大正十一年一月一日發行

女性同盟



一月號

顧問 米國美容學大家エリサベス スミス先生



美の安息へ！

『お化粧もこゝ迄徹底的に參れば申分がありません』と醫學博士夫人方が揃ひも揃つてお用ひになつてゐる日本で唯一の白色淨血劑ベーリンはこれまで何藥でも效がなかつたニキビ、そばかす、色黑、吹出物も物の一週間で跡形もなく無くなります。これは内服藥の徹底的な特長ですが、然し本藥の後から不良な模倣藥が出て困つて居ります、御注意遊ばす樣に、そして早く『美の安息へ！』

高級ベーリン美容料

内服 美身 白色淨血劑ベーリン 一圓、二圓 三圓

あぶら顔ニキビとり 外用ベーリン 六十錢 一圓廿錢

專門にアレを止む アレ止化粧ベーリン 五十錢

あぶら顔の方御化粧の福音 脂肪止化粧ベーリン 三十錢

本社 東京府大井町
支店 大阪市江戸堀北二
博仁房會社

◇全國藥店化粧品店にあり本社より直接は代價だけ送金次第送品す

二階堂眞壽著

アッシジの聖クラ、

貴族、富、智慧、美などを惜しげもなく投げ棄て、一切を基督に献げて聖フランシスの弟子となり修道院生活をなした聖女の傳である。此兩聖者の間に於ける愛の交はりと貴き同情は全篇骨子を成すものである。

定價壹圓參拾錢
送料六錢

有島武郎譯

ホヰットマン詩集

ホヰットマンの譯詩は二冊出たが、誤譯にあらざれば難解で、原詩の面影を傳へたものはなかつた今ホヰットマン研究の第一人者の譯詩を得たことは讀者と共に出版者の喜びである。

定價壹圓九拾錢
送料八錢

東京神樂町二 牛込
叢文閣
振替東京四二八八九
電話番町四八一二

女性同盟

第一月號目次

與謝野寛先生序文
高安やす子夫人著

内に聴く

玄文社詩歌部
振替東京一四一七七

四六版函入美本

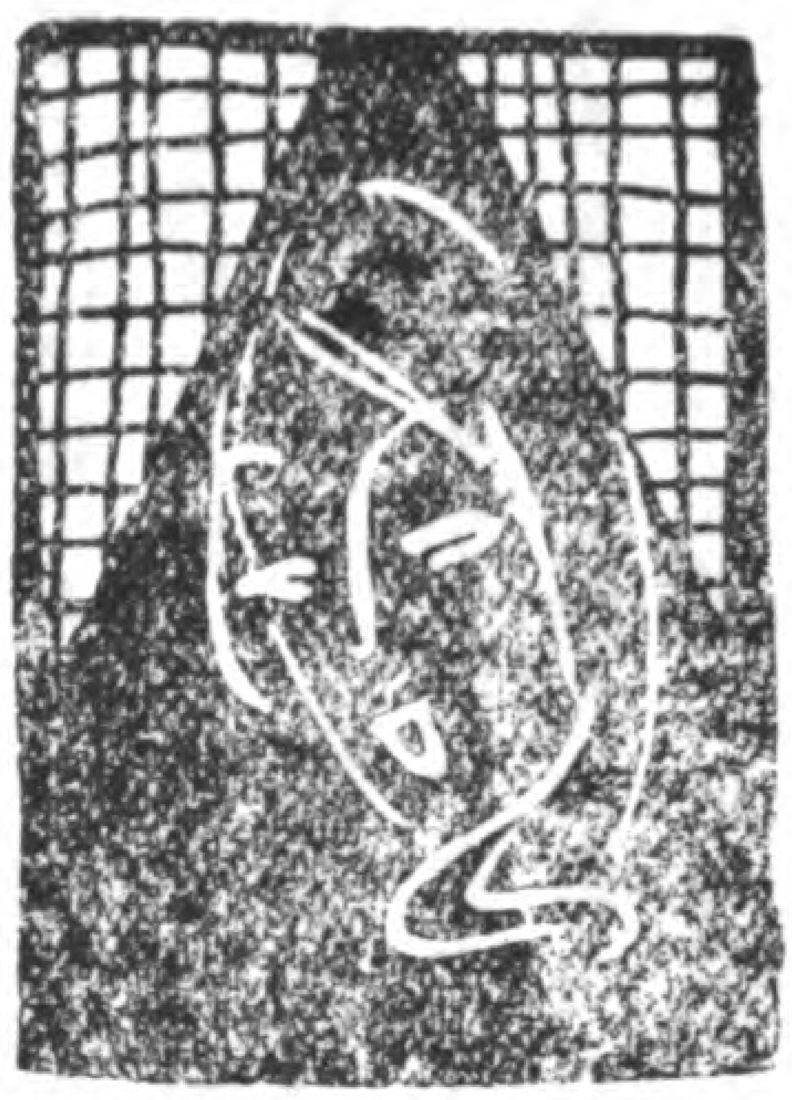
定價貳圓貳拾錢

挿繪の目次

關西婦人界の明星として令名ある醫學博士高安道成氏の夫人やす子の君は才色兼備、夙に博大なる趣味の女性として聞えたり。夫人が藝術的天分や繪畫に文學に彫刻に音樂に、これ往くとしてその豊潤なる才氣を示さざる無し。殊にその詩歌に於ける典雅なる情緒、優婉なる詞藻は、熾烈なる女流詩人として普く人に知られたり。

偶々我社その第一歌集を上梓せり。收むる所數百首、金釵の珠玉、玲々相觸れて、まぼろし生じ、纎手胸を抱けば嫋々の怨ほのかに夢を生む内に聽く宇宙の哲理！　瞳を凝す自然の神祕、げに深遠海の如き詩想は誠に巧緻なる表現に依つて渾然玉に似たり。加ふるに丹青の妙を盡せる挿繪、自ら描き、自ら刻する所の裝釘畫、一切あげて夫人の内生活を示したり。而も我社獨得なる印刷以て夫人の藝術をよく生かす。

女性同盟



第十二號

与謝野寛先生序文

高安やす子夫人著

内に聴く

玄文社詩歌部

振替東京一四一七七

四六版函入美本

定價貳圓貳拾錢

挿繪の目次

著者の肖像……コロタイプ刷

露臺から……油繪三色刷

花……油繪三色刷

海……油繪三色刷

比叡山から……油繪三色刷

搖るゝ木……素描二色刷

浪花橋……素描二色刷

京町堀川……素描二色刷

東横堀……自刻木版刷

海……自刻木版刷

藤……自刻木版刷

關西婦人界の明星として令名ある醫學博士高安道成氏の夫人やす子の君は才色兼備、夙に博大なる趣味の女性として聞えたり。夫人が藝術的天分や繪畫に文學に彫刻に音樂に、これ往くとしてその豊潤なる才氣を示さざる無し。殊にその詩歌に於ける典雅なる情緒、優婉なる詞藻は、熾烈なる女流詩人として普く人に知られたり。

偶々我社その第一歌集を上梓せり。收むる所數百首、金釵の珠玉、玲々相觸れて、まぼろし生じ、纖手胸を抱けば嫋々の怨ほのかに夢を生む内に聽く宇宙の哲理！　瞳を凝す自然の神祕、げに深遠海の如き詩想は誠に巧緻なる表現に依つて渾然玉に似たり。加ふるに丹青の妙を盡せる挿繪、自ら描き、自ら刻する所の裝釘畫、一切あげて夫人の内生活を示したり。而も我社獨得なる印刷以て夫人の藝術をよく生かす。

女性同盟



第十二號

新婦人協會綱領

一、婦人の能力を自由に發達せしめるため男女の機會均等を主張すること。

一、男女の價値同等觀の上に立ちて其の差別を認め協力を主張すること。

一、家庭の社會的意義を闡明すること。

一、婦人、母、子供の權利を擁護し、彼等の利益の增進を計ると共に之に反する一切を排除すること。

新婦人協會宣言

婦人も亦婦人全體のために、その正しき義務と權利の遂行のために團結すべき時が來ました。今こそ婦人は婦人自身の教養、その自我の充實を期するのみならず、相互の堅き團結の力によつて、その社會的地位の向上改善を計り、婦人としての、母としての權利の獲得のため、男子と協力して戰後の社會改造の實際運動に參加すべき時であります。若しこの時に於て、婦人が立たなければ、當來の社會も亦婦人を除外した男子中心のものとなるに相違ありません。そしてそこに世界、人類の禍の大半が置かれるのだと思ひます。

私共は日本婦人がいつまで無智無能であるとは信じません。否、既に我が婦人界は今日見るべき學識あり、能力ある幾人かの新婦人を有つてゐます。しかも私共は是等の現はれたる婦人以外に、なほ多くの更に識見高き、思慮あり、實力ある隱れたる婦人のあることを疑ひません。然るに是等の婦人の力が一つとして社會的に若しくは社會的勢力となつて活動して來ないのは何故でありませう。全く婦人相互の間に何の聯絡もなく、各自孤立の狀態にあつて、少しもその力を婦人共同の目的のために一つにしやうといふやうな努力もなく、又そのための機關もないからではないでせうか。私共はさう信ずるものであります。

是れ私共が微力を顧ず、同志を糾合し、玆に婦人の團體的活動の一機關として「新婦人協會」を組織し、婦人相互の團結を計り、堅忍持久の精神を以て、婦人擁護のため、その進步向上のため、或は利益の增進、權利の獲得のため努力し、その目的を達せんことを期する所以であります。

大正九年三月二十八日

●第四十五議會に請願書を提出致します！

新婦人協會はその實際運動の一つとして、例年の通り來る四十五議會(貴衆兩院)に對し左に掲げた三種の請願書を呈出するために、既に前月中旬に會員諸兄姉にあてゝ請願用紙を發送しました。但し今年は用紙數を少くしましたので、記名調印は新入會員の方々だけに限りました。(なほ治警第五條修正の方は法律改正案としても提出します)

提出は一月早々ですが、其結果は三月號女性同盟紙上あたりで御報告出來やうかと思つてをります。就きましては、此等の目的を貫徹するには、是非共一般婦人の覺醒を促して、これ等を眞に切實な婦人の要求としてもつともつと婦人界の輿論を盛んにしなければならない、と思ひます。この點特に御盡力を願ひ度うございます。

衆議院議員選擧法改正の請願書

請願事項

一、衆議院議員選擧法第八條第一號中の「タル男子」を削る事。
一、同法同條第三號を削る事。

右謹んで請願いたします。

請願の理由

（一）婦人に對して不公平なる現行法令及び社會制度を改善するために。
（二）戀愛と母となる權利とその義務の遂行のために。
（三）性の尊嚴を維持するために。
（四）無產階級の婦人を家庭から追放する經濟問題を解決するために。
（五）勞働婦人の地位の改善を計るために。
（六）姙產婦の擁護のために。
（七）母の手を必要とする子供ある母、母及敎師を必要とする子供を保護し、彼等の勞働を禁止するために。
（八）女子敎育の根本的改善のために。
（九）國民敎育の改善のために。
（十）國民保健に關する社會衛生上の諸施設を完備するために。
（十一）諸種の公共的設備を美的に、且つ完全にするために。
（十二）一切の生命を擁護し、戰爭を防止し、世界の平和を保持するために。（以上第一號修正の理由）
（十三）男女有權者數の甚しい差違を避けるために。
（十四）選擧權は獨身婦人や所謂職業婦人に必要なばかりでなく、妻であり、母である家庭婦人の立場からも亦必要であります。
（十五）且つ普通選擧の實施は理論上からは勿論、實際上からも今日その必要に迫られてゐますから。

（以上第三號削除の理由）

備考

第八條 左ノ要件ヲ具備スル者ハ選擧權ヲ有ス
一 帝國臣民タル男子ニシテ年齡滿二十五年以上ノ者
二 選擧人名簿調製ノ期日迄引續キ滿六ヶ月以上同一選擧區內ニ住所ヲ有スル者
三 選擧人名簿調製ノ期日迄引續キ滿一年以上直接國稅三圓ヲ納ムル者
家督相續ニ依リ財産ヲ取得シタル者ニ付テハ其ノ財産ニ付被相續人ノ爲シタル納税ヲ以テ其ノ爲シタル納税ト看做ス

治安警察法第五條修正の請願書

請願事項

一、治安警察法第五條第一項中の「五、女子」の三字を削る事。

一、同法同條第二項中の「女子及」の三字を削る事。

右謹んで請願いたします。

請願の理由

(一) 單に婦人であるといふ理由から政治結社に加入する自由、及び政談集會に會同し、若くは其の發起人となる自由を禁ずるのは不合理であります。

(二) 婦人がその女として、母としての思想や感情を通じて健全なる文化の發展にあづからうとする時、政事的知識を缺いてはそれを全うすることが出來ません。

(三) 社會生活乃至は職業生活に從事する婦人は、殊に政事的知識を必要といたします。これを缺く時は、彼等は多くの不利不便に遭遇しなければなりません。

(四) 今日の尙早論者の理由とするところは、現在の日本婦人はあまりに政事的に無知だと云ふ事であり乍ら、その能力を養ふに必要なる機會を拒むが如きは矛盾も亦甚しいものであります。

（五）婦人參政權問題は世界大戰の結果として既に世界的承認を得、今や我が日本に於ても男女を問はざる普通選擧要求の聲さへ起つてをります。この時に於てかゝる法律をいつ迄もそのまゝに存置する事は、あまりに時代の趨勢に反します。

（六）新聞雜誌の政治記事や政治論を自由に讀み且、貴衆兩院の傍聽をも許されてゐる婦人に、他方で政談集會に集ることのみを禁じてゐるのは無意義であります。

備考

第五條　左ニ掲クル者ハ政治上ノ結社ニ加入スルコトヲ得ス
一　現役及召集中ノ豫備後備ノ海陸軍軍人
二　警察官
三　神官神職僧侶其他諸宗教師
四　官公立私立學校ノ教員學生生徒
五　女子
六　未成年者
七　公權剥奪及停止中ノ者
女子及未成年者ハ公衆ヲ會同スル政談集會ニ會同若ハ其ノ發起人タルコトヲ得ス
公權剥奪及停止ノモノハ公衆ヲ會同スル政事集會ノ發起人タルコトヲ得ス

花柳病者に對する結婚制限並に離婚請求に關する請願書

請願事項

一、花柳病者に對し、左の第一條より第十條までの意味の條項を含む花柳病者結婚制限法を單獨法として制定する事。

一、民法親族篇第三章婚姻第四節離婚の規定中の適當なる個所へ、左の第十一條及第十二條の意味の條項を追加する事右謹んで請願いたします。

第一條　婚姻をなさんとする男子は婚姻許可證の交付を住所地の市町村長に申請すべし。事實上の夫婦關係を結ばんとする場合亦同じ。

第二條　市町村長は有資格醫師が一週間內に作成せる傳染性花柳病（黴毒、淋病、軟性下疳を含む）患者にあらざる旨の診斷書を提出せる男子に對し、婚姻許可證を交付すべし。

第三條　市町村長は貧困者に對しては、その請求により市町村長の指定せる醫師をして無料にて診察し且つ診斷書を附與せしむべし。

第四條　婚姻許可證を持たざる男子と婚姻を爲し、又は事實上の夫婦關係を結ぶことを得ず。

第五條　女子は婚姻許可證を持たざる男子と婚姻を爲し、又は事實上の夫婦關係を結ぶことを得ず。

第六條　第四條に違反せる男子は三百圓以下の罰金に處す。第五條に違反せる女子亦同じ。

第七條　虛僞の診斷書を提出して交付せられたる婚姻許可證によつて婚姻を爲し、又は事實上の夫婦關係を結べる男子は五百圓以下の罰金に處す。

第八條　本法の規定に違反して爲したる婚姻は、之を取消すことを得。

第九條　婚姻を爲さんとする女子は、其相手方たる男子より傳染性花柳病患者にあらざる旨の有資格醫師の診斷書の提示を請求せられたる場合はこれを拒むことを得ず。

第十條　當該吏員の請求あるときは、婚姻當事者又は事實上の夫婦關係を結べる者は婚姻許可證を提示すべし。

第十一條　結婚後當事者の一方が花柳病に罹れる場合には、他の一方は全治に至る迄の別居又は離婚を請求することを得。

第十二條　當事者の一方が他の一方に花柳病々毒を感染せしめたる場合には、離婚の後被害者は加害者に對し全治までの治療費と相當の慰藉料とを請求する事を得。但し勞働不能に陷れる場合には生活費をも請求する事を得。

請願の理由

（一）今日非常な勢を以て文明國を脅しつゝある花柳病の蔓延が、戰慄すべき害毒を個人と社會と種族との上に及ぼしつゝあることは、醫者の説明や諸種の統計を俟つまでもなく私共の絶えず目擊しつゝある悲慘事であります。斯かる國民的慘害に對し國家が種族衞生の立場から、其損失を出來るだけ輕減するやう何等かの方法手段を講ずべきは當然のことであつて、既に歐米に於ては花柳病豫防法を制定し國庫は莫大な經費を惜しみなく投じて其取締りに努めて居りますし、又他方に於ては善種學的禁婚法によつて、花柳病者の結婚禁止を實施してゐるところも、アメリカに於ける六州、ノルウエー、メキシコ等少くありません。然るに我が國に於ては遺憾乍らまだ是等のことに全く手が着いて居りません。

（二）私共は勿論花柳病の一般的豫防法の一日も早く制定されることを望むものではありますが、更にそれ以上婦人といふ立場から、家庭と妻たる婦人と子供とを花柳病の病毒から保護し、併せて種族の向上を計るといふ目的のもとに該病男子の結婚制限法制定の必要を痛感するものであります。何故なら私共が今日最も屢々遭遇する、しかも最も默視するに堪えない家庭的悲劇は結婚前健康であり、純潔であつた所謂良家の子女が花柳病男子との結婚によつて彼女自身と其罪なき子供と幸福なるべき家庭との上に現に蒙りつゝある幾多の慘ましき被害と、斯る大慘害を夫たる男子から受けながら、それに對して全く法律的に保護されてゐない今日の妻たる婦人の立場とであります。

（三）花柳病を家庭内に輸入する者は必ずしも男子のみに限らないのは今更言ふまでもありません。而も私共が婦人に對しては、——わけても日本婦人に對しては男子と同樣に斯る取締りをなす

ことの必要を認めないのは左の如き理由によります。

(イ) 該病男子の數は該病女子の數よりも遙に多い。即ち内務省保健調査會の報告によれば全國一二三四箇の公私立病院に於ける大正元年より同四年までの四ヶ年間の該病患者の數は、

黴毒	男	九、五七三七
	女	四、三三〇一
淋病	男	一〇、〇四二三
	女	四、二〇八一
軟性下疳	男	四、一〇六三
	女	一、三四五四

である。從つて家庭に該病毒を搬入する場合は男子の方に多く、女子の場合は未だ法律を設けてそれを制裁する必要を認めない程度であること。

(ロ) 未婚女子に對して斯る身體檢査を行ふ事は實際に於ては習慣上可成りの困難や、又それに伴ふ危險も豫想されて、男子に於ける如く容易に實行されさうもない。その上既に述べた如く該病男子の數は女子のそれより遙に多數であつて、斯る難事を敢てせねばならぬ程の必要を未だ認めないこと。

(ハ) 或地方又は或社會に於ける未婚女子にたとへ該病患者の多いことがあるとしても、かゝる局部的現象をもつて全體を論ずることは出來ないこと。

(ニ) 男子の性的生活は女子のそれに比し遙に放縱に流れ易き傾向ある上に、事實今日の男子の多くは放縱であること。それ故花柳病の媒介者となり、傳播者となる婦人は殆ど賣笑婦に限られてゐるに反し、男子はもつと一般的な意味に於て該病の媒介者であり傳播者であること。そしてその事實は夫から感染した婦人花柳病者に比し、妻から感染した男子花柳病者の極めて少ないといふ醫師の承認によつても證明されること。

（ホ）此の法律は家庭に於ける婦人保護を目的とするのみならず、婦人を通じてなし得るところの男子の放縦なる性的生活に對する一種の制裁であつて、そこに道徳的意義をも併せて含むこと。

（四）斯くの如く私共が花柳病男子の結婚の取締を要求するのは、家庭を、妻たる婦人を該病毒から保護すると同時に、未來の子供を保護し、國力の本源である國民の實質的改善を計り男女共同の義務であり使命である種族への奉仕を全うせんとするものであります。

請願の紹介は左の方々にお願ひいたします。

衆議院議員選擧法改正案

貴族院――山脇玄氏
衆議院――高見之通氏

治警第五條修正案

貴族院――鎌田榮吉氏
衆議院――一宮房次郎氏

花柳病者結婚制限並に離婚請求案

貴族院――三宅秀氏
衆議院――根本正氏

尚、議會の傍聴を御希望の方々には、前日中に御申越あれば傍聴劵の御世話をいたします。現在の議會のやうな騒々しい、不眞面目な痴態振を見ては、誰しも政治といふものに就いて眞劍に考へて見ないではをれなくなりませう。

時事批判

一九二二年を迎ふ

奥むめお

ひと朝毎に目に見えるやうに脊丈が延びてゆき知恵づいてゆく發育盛りなうちの坊やに見とれ乍ら、私はいつも次のやうに思ふのであつた。『坊やにとつて、誕生第二年である今年は、恐らくはその一生涯を通じて一番變化の多い、意義深い年であるのだらう』と。

昨年の六月に生れた坊やは、去年はじめてま夏の暑さを知り、冬の寒さを知り、花を知り、鳥を知り、日向ぼつこの味を覺え、怒ることを知り、甘へる事を覺え、媚びる事をならひ、書物を見る事やおかねを以て菓子を買ふ事さへ覺えて、昨年は未だ呼吸をするおもちや位にしか思はれなかつた赤ン坊であつたのに、今ではもう一人前の生存權を充分に主張して惡戯をしつゞけてゐる。凡ゆる經驗が坊やの生長のための血となり肉となつてゐるのだ。全く『坊やは恐るべき勢で生長してゐる！』

坊やと同じやうに昨年の春に生れたわが新婦人協會の誕生第二年は、これは又何といふ多事多難なつらい歳月であつた事だらう。曾つて思ひも及

なかつたやうなつらい、口惜しい、嬉しい數々の社會に於ける經驗が或時は協會を倒さうとし、又殺さうとし、或ひは營養不良にし、病氣にし、宇頂天にして、人生に於ける尊い經驗として味はふにもその遑さへない程、辛辣に飜弄し了さうとしたではなかつただらうか。

私は辛かつた、と同時に變化多かつた一年を振り返り見ながら、新しい大正十一年を今こゝに迎へて、今更ならぬ深い感慨に胸を打たれる。

大正十一年といふ年がどうぞいゝ年であるやうに。

そして私は、今年こそ、わが婦人界にとつて意義多い、記念すべきいゝ年であるに違いないと、確信に近い或る豫感を持つ者である。少く共さうあらせたいと意氣込んでゐる、と云つた方が或ひは穩當であるかも知れないが。

然し私共は新しく目覺めたる婦人の欲求の、如何に根深く強いものであるかを知ると同時に、それらを拒む盲目的な因襲の力といふものゝ、又いかに恐るべく侮りがたいものであるかを知らねばならなかつたことをこゝに附加へたい。そしてそれに備へるために自分達が持つべき武器、たつた一つある武器が何であるかを覺る事が出來たといふことを。力! あゝ力が欲しい、と斯ふ內に囁く聲を私は聞く。そこいらに投げやりにされ乍らちらばつてゐる一つ一つの婦人の力を打つて一丸とした大きい強い力、婦人といふ名に於て一にされる婦人全體の意志をあらはす力、今われ〳〵婦人にとつて一番で必要なものはこの力だ。婦人が解放されるために、婦人が人間として起つために、婦人がほんとうに婦人らしく生きるために是非なくてならぬこの力。

△　△　△

一個の政治問題として起つたワシントン會議は日本でも婦人の平和論者の活動を見るに至りました。婦人平和協會よりは井上秀子氏がその代表として渡米し、婦人矯風會よりは老矢島楫子氏が渡米された事は人々の記憶に新たな事である。自分達の望ましい徹底的な平和の理想としては、その期待をワシントンに繫ぐ事は望み得ない事であるとしても、とにかくさうした事實が現實の問題と

して取扱はれるやうになつた事は喜しい事である。ただこの際自分達の云ひたいことは、新しく生れた平和論者が、在來の所謂政治家の外交的辭令や駈引にその望みの全てを懸ける事より、一歩進んでより根本的に、平和思想の宣傳とその實行にその指を染めて欲しいと思ふことである。

日本に於て、多くの婦人平和論者の説くやうに、單に軍備を制限してそれを教育費に充てるといふやうなま温い立場よりも、眞に平和の愛好者としての婦人の要求を鮮明にすると共に、それ等の人々の主張がこれまでの政治意識の上に立つた人々にとつて、一つの驚異として現れるやうな日を希望しないではゐられない。

△　△　△

去年生れたばかりの會で、その消息の氣掛りなものが私に二つある。一は婦人事務員協會、他は赤爛會。

婦人事務員協會と云つても、その存在を知らなかつた人の方が或ひは多い位であるかも知れない然し實はもつともつと早くに出來て居なければならなかつた筈のものである。現在婦人事務員の殆んど全部が不當に康い賃銀に甘んじて、而も男子專制に災ひせられた不安定な地位に働いてゐるのである。婦人事務員協會が勢力ある團體となつた曉にはと、あれやこれや考へてその將來を樂しみにしてゐた私としては、同會の趣意書は餘りに不徹底で、無意義なもの丶多いのが不滿であつた。

「本會は會員相互の援助を旨とし、共に知識を磨き品性を陶冶して、婦人事務員たる職業的地位の向上發達を期し、併せて職業範圍の擴張を圖り、以て精神的物質的の安定を得るを目的とす」云々と見えてゐたと思ふが、單に修養と救濟を目的とする會ならば、わざ／＼事務員だけで新しく別個のものを作る迄もなく、修養を立看板の會は多過ぎる程あつて、互ひに會員の爭奪をやつてゐる筈ではないか。好んでさういふ煩しさに就く必要がどこにあらう。職業を等しくする事に依つて、全ての婦人事務員が婦人事務員協會といふ名に於て團結する以上、そこには新しい、而も最も緊要な意義の存する事を忘れてはならぬ。私は同協會のあの趣意書が誰の手にて書かれたかを知らず、唯、

是非共近き將來に於て會員の自發的要求から全部書き改められて、同協會が新しくスタートを切るやうにと念じてゐたのである。瓦解するにしては惜しい會であつた。どうぞよく發展するやうにと念じてゐる。

赤爛會の消息は世上よく喧傳せられるらしく、世事に疎い私の所までも、よいにつけ惡いにつけ風の便りが到着する。『我等の同胞姉妹を無知と窮乏に沈倫せしめたる一切の壓制に對して宣戰する』と名乘りを揚げてゐるだけに、同會は去年のメーデーのたゝかひに生れて、其後も鬪ひに始終してゐる。（目下のところ婦人運動の全てがたゝかひであるとも云はねばならないが、同會のやうに鮮明な社會主義の旗印を樹てゝゐるものにとつては、もつとはつきりした所謂鬪ひである）

生後一年半の赤ン坊まで三ヶ月間の牢獄生活に伴はねばならなかつた高津たよ氏や、この頃の明け方の冷たさに、堺まがら氏中曾根貞代氏等監禁されてゐる人々の、火の氣のない明け暮れなど思ふにつけて、私は今赤爛會の經つゝある大きな、悲痛な試錬がどんな結果を齎すであらうか、としみ〴〵いろんな事を思はせられてゐる。

△　△　△

去年は戀愛問題に就いて新聞や雜誌を賑はせる事の多い年であつた。私はその問題の提出者である當事者にとつては、それ〴〵眞面目な、悲痛な意味を持つてゐたに違ひないとは思ふが、世間は（或少數の人々を除いて）毎もその背後にひそんでゐる人間としての婦人の存在をあんまり考へないで、どつちかと云つたら唯所謂性的な興味の對象としてだけ見てゐる事を考へた時、こゝにも婦人といふものゝ背後に當然なければならない大きい人間としての品位の要求を痛切に感じた。恐らくは世間の耳目を驚かした幾つかの問題のやうな事件は、常に世間の到るところに演ぜられてゐるであらうと信ずるものであるが、私はさうした興味中心の世間の風潮が、それらのかくれた、或ひは戀て起らうとしてゐる澤山の事件を傷けないやうにと、望んでやまない。良き意味に於て、又惡しき意味に於て、破綻しなければならないものは竟に破綻しなければならない。

例へば白蓮女史の問題でも、世間が、殊に多くの女性がその問題のうしろにかくれてゐる無數の女性といふ問題に、もつと深い考察と反省とを用意しなければならないと思ふのである。

△　△　△

今年もまた例に依つて、婦人參政權、治警第五條修正の運動をわが協會で行る事になつてゐる。婦人參政權に就いては今こゝに云はず、治警第五條修正のために第四十二、四十三、四十四と三議會を通じて試みた私共の對議會の運動が何を訓へてくれたであらうかを考へてみたい。

私は治警第五條修正のための運動を、文字通りに對議會の運動として行つたのは、何にしても一番拙劣であつたと思つてゐる。拙かつたと云ふよりも、もつと惡かつたと、少く共私一個はさう思つてゐる。現在の政治家がどんなに政治といふものを惡くし、その本質を誤らせてゐるかは、今更らしくこゝに喋々する必要も認めない程で、私共はわれ〳〵婦人の要求を――政治的にも社會的にも自由にならうとするわれ〳〵婦人の要求を、如何に不眞面目に取扱つたかといふ事に就いて憤慨する前に、まづ私共婦人は政治とは如何にあらねばならないものかと云ふ事を公正に、そして賢明に考へる事が出來るやうになる必要があると思ふ。

政治といふものを、單に政權の奪ひ合ひや、驅引や野心やできりもりしてゆく特權階級の利權の擁護といふやうな、在來の政治意識とは沒交渉により根本的な社會問題の一つとして見やうとする傾向が、思想界に漲つてゐるといふ事を思ふ時に私共の前に展開されてある參政權運動などに對しても、また異つた立場を考へさせられないではゐられない。

（一〇、一二、二〇）

勞働運動と婦人運動の接觸點と分岐點

杉森孝次郎

勞働運動と婦人運動とは、小兒運動及び被征服民族、人種運動と共に、近代に於ける道德的解放運動の二大內容だ。道德的解放運動は、その本質に於て、人格の自由を目的とする努力だ。勞働運動は、事實上、及び可能上、及び更らに理想上、勞働は社會的一大分勞であり、勞働者は他の社會的分勞に從事する人々と同樣に人であるにかゝはらず、その勞働の分勞的意義と、その勞働者の人的要素が、社會殊に勞働者以外の社會から認識されず、また評價されないところに、その發生理由と、發達理由とを有する。婦人運動は、育兒、家庭、その他の業務は、社會的一大分勞であり、婦人は、婦といふ性的實在であると同時に、一層根本的な、支配的な意義に於て、人といふ超性的實在であるにかゝはらず、從來の多くの婦人が代表する方面の業務が、社會殊に男子の人々からして、その社會的分勞としての意義を認識評價されず、また一層主なる缺陷として、婦人の人格が、認識評價されないところに、その當然の發生理由と、發達理由とを有する。勞働運動も婦人運動も、分勞と人の正認を本質的目的とする。

以上は、勞働運動と婦人運動の接觸點の總眼目だ。勞働運動と婦人運動の特異點は、勞働運動の方は比較的に、分勞的事實に對する認識評價缺乏を補足する意義を有し、婦人運動の方は、比較的に、生物學的事實に對する認識評價の缺乏を補足する意義を有するにある。筋肉勞働は卑賤業だ。筋肉勞働者は卑賤人だといふ社會歷史的ブルジョワ的迷信が近世勞働運動を憤起させた。婦人は男子同等の人格者で

はないといふ男子間の、ある程度までは婦人自身の間にさへも於ける歴史的社會的生物學的錯覺誤信が近代婦人運動を逆招した。

　能力としての人の本質は道德的能力だ。價値としての人の本質は道德的價値だ。義理、人情は道德の主材だ。義理人情の有能者は、それだけですでに人としての有資格者だ。人の範圍が、男性の範圍でなく、兩性の範圍であることは、この一點から考察しても明白だ。心理學的に、男女兩性は、大綱に於て同一責任だ。細目に於てやゝ異別責任だ。認識生活に於ても、感情意志の生活に於ても、男女兩性は、概ね共通の理解力と發動力とを有する。美的創造力に於て、各性の特異質がいくらか認められるけれども、鑑賞力に於ては、各性は、その異性獨特の創造に對して、客觀的妥當價のある理解と判斷を持ちうる。聲樂に於て、兩性の本質的特異點が多少認められる。一性が他性の音聲を創作しまたは模作する能力には限りがある。しかしながら、各一性が各他性の音聲を認識し評價する能力にはそれほどの自然的制限がない。男女兩性が、人のうちの差別であつて、人と人でないなにものかとの差別でないことは、多く論究する要はあるまい。

　一社會のすべての人々は、多少の程度に於ける消費者だ。いはゆる富すなはち物質的價値の使用者だ現代の富は、大體に於て産業の一結果だ。勞働は、富の生産に必要缺くべからざる一要素だ。勞働なしでは、たとひ經營、科學、技術の三要素が完全に揃ひ、また原料、機械、工場が同時に十分に具備しても、富は生産されない。富の消費は、社會の各人がそれを絕對的に必要とするといふ意義に於て、その富の生産に必要な勞働は、社會の各人の絕對的必要を滿たす一方法であると明確に考へられる。勞働者なしでは、各人の消費者としての生活が不可能だ。消費者としての生活が不可能であれば、その人は、生産者または創造者としての生活を可能にすることが出來ない。たとへば、藝術家も、學者も、政治家も、衣食住、道路、乘り物等を必要とする。けれども、それらの富の生産には、かれらは、すくなくと

も直接に參與しない。今日、人が、勞働者のかたちに於て、從事する業務を、機械がどの程度まで代辨し得るかは、人類の發明力と、今後の努力によつて大部分は決定される問題だ。しかし現在及び近い將來の事實としては、勞働者は、富の生産のために必要な一大人間的要素だ。だれかゞ勞働に從事しなければ、社會の各人の生活が困難乃至不可能にされる。それ故に、社會の各人は、勞働をば、各人自身の本質的必要を滿たすための一分勞であることを明視し、勞働者は、健康、教育、獨身者にもあてはまる意味に於ての家庭、娛樂、道德的人格的自己尊貴、その他の人間共通の本質的必要を、他の分勞に從事する人々と同樣に有することを明視すべきだ。そしてこの認識に相當した評價すなはち待遇をなすべきだ

育兒と家庭は、多くの婦人の責務に屬するとしても、その育兒も、家庭も、婦人自身の目的であるばかりでなしに、同時に、男子の目的であることを、社會は明視すべきだ。種族保存は、男女共通の一目的だ。家庭は、今日及び殊に今後に於ては、經濟的には、消費の社會的一單位だ。この事實と關聯して家庭は、專門、職業を内容とせずに、雜務を内容とする。けれども、消費と雜務は、生産と專務に從事する人々のために、必要不可缺だ。消費と雜務を、責任をもつて經營してくれる家庭の主婦があればこそ、經濟的生産者も、文化的創造者も、その職業、專門に集中することが出來る。專門と雜務の間に、分勞的協力を認めずして、二元的優劣を認めるのは、全然誤認識だ。

一人が、自己の本質的目的を達する力を、他人と協力して始めて獲得する場合が多い。この協力が社會だ。社會は、この理由によつて、本質的には、すなはち意味に於ては、一人だ。生物學的及び人爲的事實に聰明を遮蔽されて、婦人と勞働者に、社會的分勞と、人格的實在とを發見しえない限り、婦人運動と勞働運動とは、人類の本質的、理想的必要として發展すべき運命をもつ。

婦人の分勞が、育兒及び家庭に限られるといふ主張をば、この一文はすこしも帶びない。專門と職業の教養及び從事の機會を、男女兩性にむかつて十分に開放することが、今日及び今後の社會の一必要事だ。

婦人問題の二方面

藤井悌

一

婦人問題の範圍は極めて廣いやうであるが、大體に於て之を二つの方面に分つことができさうである第一は性としての婦人を男性の專制から如何にして解放することができるかの問題であり、第二は無産者としての婦人を有産階級の專制から開放することの問題である。それゆゑに後者は直ちに一般勞働問題と繋がるものであつて、問題の重點は寧ろ其の無産階級たるの點にあり、性の區別は本質的の意義を有しない。これに反して前者は男女の性、特に謂はゆる第二次性徴の極端な分岐が元になつて發生したもので、從うて此の分岐の著しいほど問題の重要さが增して來る。

女の第二次性徴は文化の進んだ社會に於けるほど著しく、また同一社會の中では文化のより進んだ社會に於けるほど著しい。一方から見れば其れは男子專制の程度の大きいことを示し、他方から見れば婦人自身にも生活上の餘裕の多いことを表はすものである。一口に云へば婦人が實用――生活のための直接の鬪爭に適應すべきこと――から釋放される程度の高いことを意味するのである。それゆゑ此の種の婦人問題は、主として中産階級婦人のレジユアと倦怠とから生れてくる。彼等は謂はゞ徒然に苦しんで他人(男性)の已むを得ずしてやつて居る仕事に手が出したくなつたのだ。のみならずレジユアは彼等に教養を與へ、その自覺を高めた。彼等は今更のやうに、自分が性としてばかり生きてゐて、人間としての何等の活動をも許されてゐないことを覺つた。また社會の組織に於て、專ら男子の意志により、男子の都合のために作られてゐる部分が、際だつて目について來た。そして斯やうな組織の根原として先づ

目に映るものは立法である、政治である。斯くして婦人參政權運動は起らざるを得なかつたのである。

二

思ふに今日の文明社會に於ては、婦人の第二次性徵が餘りに發達し過ぎてゐる。私は昨夜偶然エハガキ屋から裸體美人と名馬との寫眞を買つて來た。いづれも美しい。然しつくづく見比べてゐると、馬の美には寸分の隙がない、全く理づめである、然るに美人の方には何となく異樣なものがある、それは過度に發育した脂肪、殊に脚部の其れから受ける印象である。全動物界を通じて、最も實用的であるべき足の先まで脂肪で丸くなつてゐるものは、人間の女を除いては他に見られまい。これは要するに男の觸接慾(Tastsinn)が拵へ上げたものであらう。ワイニンゲルに依れば觸接慾は男の性慾に於て本質的のものではない。謂はゞ贅澤物である。然し男の支配する社會では此の第二次的の慾望が最も顯著に働くのである。なぜなら第一次的のものは當然(又は必然)に實現されるからだ。たとへば社會制度の根原に就いて見ても、人間の第一次的慾望は要するに食ふことである、然しそれは目に着くやうな形を取つては表現されない。これに比べると優越慾は第二次的のものである、つまり食ひ得る地位を持續乃至確保するための慾望に過ぎない、然るに現實の社會に於て著しく人心を刺戟する制度は、多く此の第二次的優越慾の滿足を表現してゐる。

少し脫線氣味になつて來たが、とにかく此の第二次性徵の過度の發達は、色々の點に於て人類を禍ひしてゐる。それは一方には女性を男性の目に餘りに誘惑的なものとしてしまつた。彼等はもはや女を異性としてより以外には認識することができなくなつた。そして『性』といふものゝ人生に於ける地位を過大に見積る癖がついた結果、觀念として想像としての性慾がむやみに發達して、一體に男子を廢頽的氣分に導くことになつた。これが現代の氣の毒な特徵の一つである。それから他の一方では、女を理解し難いものと考へさせるやうになつた。『女は謎である』といふ。生殖に關する特殊の任務を除いては、男

女は其の構造乃至生理に於ても、また其の心理に於ても、本來何等の異なつた點を持たないのである。然るに女を同じ人間として實感の上で認識することができなくなつた結果、女の内的生活に對する理解がなくなり、廣い意味の性的關係以外の領域に於ては、女に對する同感同情が生じ難くなつてしまつた。そして女が男に對する態度にもいくらか之に似たものがある。

そこで男女は互に息苦しいほどの性的索引を感ずると同時に、いざとなれば男は男同志女は女同志といふことにならうとするのである。これが近代文藝に於て女性憎惡の文學と男性折伏の思想とを生じたわけである。そしてこれがまた女性に對する男性の侮蔑、あらゆる方面に於ける女性の屈從的地位の一大原因をなしてゐるのである。

次に彼等は階級として鬪ふべき相手を持たない、少くとも明確に之を認識しない。そこで彼等の爭鬪の相手としては、同階級内の異性が選ばれることになる。苟くも運動なるものが成り立つには强力な相手がなければならない。いな時としては氣勢を高めるために相手方を實際以上に頑强に仕立て上げる必要さへある。それゆゑ此の種の婦人運動者はやゝもすれば男子の優越の地位を誇張し、その横暴と罪惡とを好んで摘發する。そこで苟くも男子を敵とする運動は總て歡迎され、理論上何等の脈絡のないものでも、たゞ此の一點に於て共通でありさへすれば、直ちに同系統内に取り入れられる傾きがある。假へば廢娼問題の如きも、主として中產階級婦人に特有の人道主義的乃至感傷的慈善の動機から發したものと思はれるが、同時に其れが性的對抗の問題に絡みついてゐる點に於ても、中產階級的の色彩がかなりに鮮やかである。これをもつと廣く賣淫問題として見れば、例のベーベルを始めとして、社會主義系統の學者は必ずこれに觸れはするが、人類平等の思想の當然の歸結たる男女平等の觀念とか、あらゆる特權を憎む心とかいふものから來る其の理論的方面には、大した實質的主義があるとは思はれない。其れは寧ろ、現存の資本主義的制度を破壞してしまはなければ到底賣淫を根絶することは出來ないとすること

ころの、消極的意義に於てのみ價値があると考へられる。男女優劣論に於て女性の優勝を主張する如きも、社會主義の方面ではやはり消極的の效用を有するに留まるので、中産階級の婦人問題に於ける效用の方がより適切であると思はれる。

そのほか婦人の經濟的獨立、戀愛結婚離婚の自由、近來特に喧ましくなつた母性保護論の如き、孰れも少くとも知識階級、即ち何等かの意味に於て餘裕ある階級の婦人の側に重點を有する問題であると見て大した間違ひはなからう。

要するに普通謂ふところの婦人問題は、初めにちよつと觸れて置いたやうに、誇張された第二次性徴を出發點としてゐる。そして此の誇張を是認し寧ろ讃美するかに見える側の代表者にはエレン●ケイがあり、この誇張に反對し、これを排除せんとする側の代表者にギルマン夫人がある。然し其のいづれも婦人問題を專ら又は主として女性としての方面から論ずる點に於て共通である。

三

以上の點についてシー●ガスコアンヌ、ハートレー女史は面白い敍述を供してゐる、試みに其の『The Truth about Woman』といふ本の中から少しばかり拔き書きしてみよう。

『性的文化といふものはある程度までは性的牽引を惹き起す。然し其れが不適當に誇張されると、性的敵對が生じて來る。第二次性徴の過度の發達は人類の進化にとつて有利なものではない、なぜなら餘りに性的に分化し過ぎたものは、父母としては惡父母であり、行動に於ては非社會的になるからである。たとへば大猫の牝は屢々自分の都合のために仔殺しをするし、七面鳥の牡や鶉類の間にも同樣のことが行はれる。またヒレアシシギの牝には母的本能が全く萎縮してしまつてゐる、そしてこれらの動物は孰れも性的分化の甚しい種屬なのである。今一つの實例としてはアゼンスの婦人の低卑な地位を擧げることができる。アゼンスでは兩性の特徴が離れ過ぎた結果、婚姻關係が墮落したばかりでなく同性愛の流

行をさへ來たすに至つたのである。

『現代文明の下に於て、殊に其の不自然な男女關係の結果として、過度の發達を遂げた「女らしさ」の中の或る二三の性質は不當に誇張され、性的感情といふものは過敏に且つ不節制なものになつてしまつた。そこで深い内部の性的反感が、外部の過大な性的牽引によつて僅かに覆はれると言つたやうな、有樣になつた。從うて男と女とが眞に理解し合ふといふことは殆ど不可能となつた。こゝに男子の婦人虐遇の根本原因が存すると私は思ふ。これと同時に、婦人の道德は男子の其れとは別なものと考へられるやうになつたので、婦人は其の「性」を自分の目的を達するための最も有效な武器とするに至り、そしてたいていの男は、愛とは異性相互の了解であるといふことを忘れて、この武器の力に魅せられてしまふのである。女の勢力といふ言葉の意味はこゝにある。「服從によつて支配する」といふことは、「性的誘惑と媚態とによつて支配する」といふ意味に外ならない。性的分化の結果はついに吾々婦人を斯やうな「賣愛」に導いて來た。

『それだから男子が婦人の性的壓制に對して反抗したことは一再に留まらなかつた。女性嫌惡の思想は遠い昔のギリシヤ時代からある。近頃になつてもショーペンハウエル、ストリンドベルヒ、ワイニンゲルなどの亞流や、更に大トルストイの如きをさへも含んだ此の女性嫌惡軍の一隊は、要するにむちやくちやの濫用に陷ゐつたところの婦人の力に對して、幻滅、飽滿、倦怠の心から反抗を企てたのである。かのクリスト教の厭ふべき敎條たる、婦人の原罪的惡魔的性質に關する思想の如きも、同じ根原を有して居る。

『然しながら婦人の繋縛から逃れようと焦る男子の反抗は、殆んど效力がなかつた。そして今や此の長い男女の爭闘劇に於て、男子に對する婦人の反抗といふ新らしい舞臺が開けてきた。性的分化は、今日の過渡期に於て、性的混亂及び敵對を斯うまで行き詰まらせてしまつたのである』

ハートレイ女史は右のやうに述べたあとで、この危機を救ふためには、婦人は其の生理的本質から當然に發達し來つた特徴以外の誤つた性的分化、即ち婦人自身の自然の性能を損ひ、男女間の理解と眞の愛とを妨げ、種族の活力をも壞るところの性徴から逃れ、全生活を性的方面に沒入させるやうな因襲を脱却しなければならぬ、そして『男子からの解放』といふ叫びを『男子と共に解放』されんことを求める叫びに變へなければならないと説いて居る。

四

私は心身兩方面に於ける婦人の第二次性徴を、必要なる最少限度まで減ずるやうに心がけることが、男女双方の幸福のために、また人類の利益のために宜いと思ふ。そして少くとも心的方面に於て之を實現することは、廣い意味の敎育の改善に依つてかなりの程度まででき得ることゝ思ふ。つまり私は、生殖と育兒とに關する必須的分業を除いては、男女をできるだけ同一の立場に置きたいと思ふのである。從うて婦人解放のための一切の運動には、その實行上の色々の障害や困難に處するために相當の考慮を要求することは無論であるが、少くとも其の目標とするところのものには絶對に賛意を表することを憚らない。從うてまた、既に現實の問題としても、男女を同列に立たせ共通利害に於て觀るところの婦人勞働問題に一層大なる興味と關心とを有するものである。

謂はゆる『女らしさ』を減ずるといふことは、家庭生活を荒廢させるの危險を伴ふかのやうに考へる人もあるらしい。然しながら家庭に於ける婦人の單なる性的の地位が、果して家庭を健全にする所以であるかどうか。今日社會の實狀を見ても、男女の仕事の間に比較的差異の少い農民の家庭では、子供は過度に性的となつた女性の影響から免かれて、割合に剛健な實用的の人間として生育し、以て廢頽した都會生活の缺陷に對する絶えざる補充者となつてゐるのである。のみならず母に對する父の單なる性的愛撫の代りに友情が生じ、家事に對する父の侮蔑的無關心の代りに共同經營の念慮が起り、また子に對す

る母の本能的愛情に理性の晦まされざる指導が加はつたならば、家庭は夫婦自身の爲にも子供のためにも遙かに價値の多いものとなるであらう。母が子供を躾けるのに、やゝもすれば『父に言告ける』ことを必要とするのは、父母のためにも子供のためにも禍ひである。

婦人の生活範圍が餘りに廣くなつた結果として、假りに現在の家庭の形式が壞れなければならなくなつたとしても、その時にはまた種族のために最も適當なる生活樣式が新たに現出するであらう。私は飽くまで個人主義に立脚する、たゞ此の『我』を無限に擴大しようとするだけである、從うて途中の階段はすべて之を過渡的のものと見る。留まるを適當とする限りはそこに留まつてゐる、更に擴大するの機緣が熟しさへすれば猶豫なく擴大して行く。家庭然り。國家亦然り、言ひかへれば眼前には常に隣人あり、目標としては常に一切衆生ありといふことになる。

五

前に私は『男と共に開放される』といふハートレー女史の語を引用した。同女史はこれによつて、男女とも性的惑溺及び敵對の繫縛から免れて種族のために母性の尊嚴を確立すべきことを意味したのであるが、私は此の語を『人間としての解放』の義に用ひたいと思ふ。人間が求めたところの解放は、昔ては敎權から政治の其れであり、また少數者政治の權利からの其れであつた。今日に於ては解放運動の鋒先が、主として經濟的特權階級から無産階級に向けられてゐることは言ふまでもない。即ち當面の最も重大なる社會問題は、社有産階級から無産階級の解放である。それは無産階級自身にとつて當然の要求であるのみならず、社會全體にとつて正義であり、人類の進化のためには必要である。婦人も亦人間として此の人間向上運動に參加しなければならない。また之を婦人のみの立場から觀ても、男子の專制は所有の專制から派生したものであり、其の源を淸めなければ末流は遂に澄むの期がないのである。他の一切のものが得られても、經濟的獨立が得られないかぎり婦人の解放は不可能であらう。然るに無産階級に在つては男子に對する婦人の經濟的獨立どころではない、男子自身が全然其れを有しないのである。こゝでは婦人は同階級内の男子を相手どる遑がない。然るに今日のところでは多數の婦人勞働者の存在は却つて勞働運動の發展を妨げ、その進行の途上に於ける足手纏ひとなつてゐる。特に全工場勞働者の六割を女工が占めてゐる我國の社會に於て、また大戰後女工の劇增を來たした西洋の社會に於ても、この問題はいよ〳〵その重大さと痛切さとを增してきたのである。然らば婦人勞働者は現にいかなる地位にをるか、彼等が勞働運動に面白からぬ影響を與へるのはなぜであるか、また之に對して施すの術いかん、これらの問題を論するのが本稿の當初の目ろみであつたのであるが、概論に於て既に多くのページを費してしまつたから其れに就いては他日稿を改めて述べたいと思ふ。

野のトリトンの唄

高群逸枝

窓の彼方に野はありて
今しも月は昇りたり
夜は夜もすがら鳴く虫の
聲きく時のあはれさよ

いと美しきものに心奪はれて
涙とゞめがたく立ちしかば
神々のなかの散歩者われに來て
何をか囁きたまふ

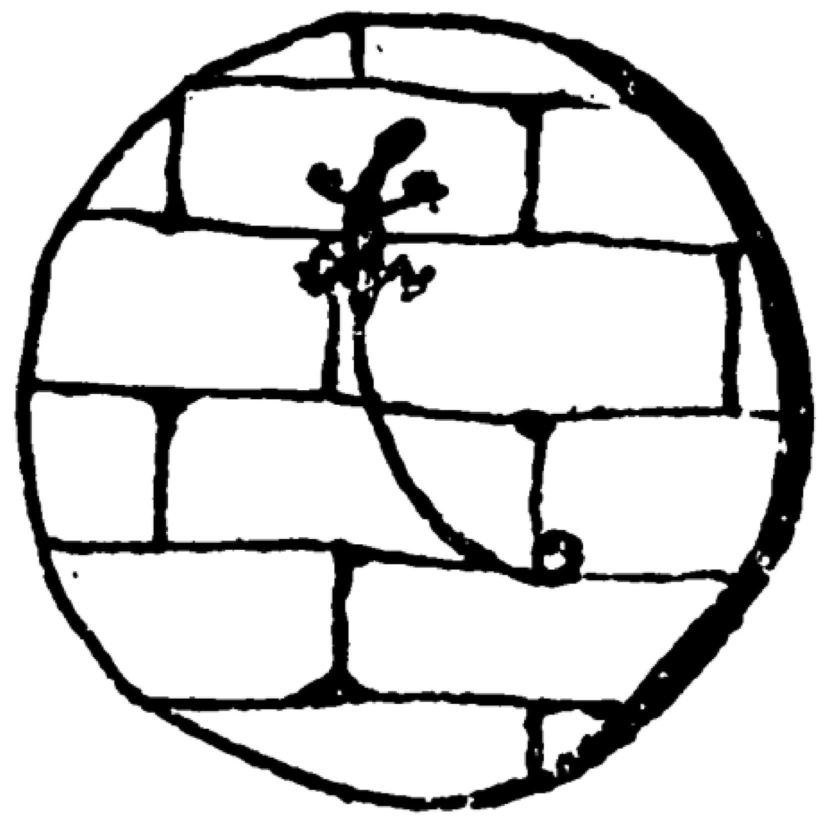
世は幻に似て果敢なく
人は塵の思ひに巷に迷ふ
しばらく道を歩み行きて
月の昇るかたを見ずや

風に吹かるゝ草の花
笑顔涼しきいさら川
たゞ獨り天地のなかに
歩み入るこそたのしけれ

此の時野のトリトンが唄ふには
迷ひ闘ふことを捨てよ人(ひと)
されば闘へ片手にて、もしも汝が
わが絶對のふところに在るならば

チョルヂュ・サンドの一生

重徳泗水



Je Pleure une morte
et salue une immortelle.
Victor Hugo

葬式に於けるユーゴー弔詞の一節。
(我は死せる女子の爲に泣き
不滅の女史に向て敬禮す。)

(George Sand は本名はオーロール・デュパンで、一八〇四年七月一日、巴里で生れ、一八七六年六月七日ノアン(Nohant)で逝いた。彼女の先祖は索遜選擧侯で波蘭王であつたアウグスト二世である、二世の後裔索遜のモーリスは數多の情婦を持つたのであるが、その中の歌女ド・ヴェリエール(藝名)との間に生れたのが、女兒マリー・オーロールで、その子モーリス・デュパンが即ちわがヂョルヂュ・サンドの父である。

彼女はノアンで祖母の家で育てられた。

註、ノアンはアンドル縣の一村落で、ベリイ Berry(四國九州といふ如き大地方に在り、巴里の南西約六十五里の處)である。

彼女は幼少から野や森を驅廻ることがすきで、ベリイ地方の田野生活に魅せられた。教育は粗かにせられ、讀書ずきでも、村童と共にやたらに遠方に出かくるので、讀書はしば〳〵放擲せられた。これではどうもならぬとて、祖母は一八一七年にオーロールを巴里の『クーヴァン・デ・ザングレーズ』(尼僧院)に入れ、彼女は一八二〇年まで、嚴格ではあるが暖か味のある規律に服し、身體上及び道德上、其處で多くの賜ものを受けた、然し彼女の神秘的傾向が次第に强まつたので、祖母は彼女をノアンに呼び戻した。オーロールは今度は乘馬を習ひ、狂奔的騎馬を事とした。

然し彼女は熱心に讀書を始め、殊にシャトーブリアンの傑作『チェニー●デュ●クリスチアニスム』(基督教の文化)を耽讀し、大に感得する所があつた。それから哲學者ロック、コンディヤック(佛人一七一五――一七八〇年)モンテスキウ、ベーコン、アリストテレス、ライブニッツ、パスカル、ラ●ブリュイエール、モンテイニュなど、それから詩人ポーブ、ミルトン、ダンテ、ヴィルヂル、沙翁などの作品を順序なく讀み倒し、又ヂァン●ヂャック●ルーソーが最もすきで、彼女に多くの影響を與へた。

デュパン家の家庭敎師デシャルトルは彼女にヴォルテールの懷疑主義を吹き込んだが、彼女は男裝して、敎師と共にしば〳〵狩獵に出かけた。何しろ田舍のことで、忽ちスカンダル扱されたが、オーロールは人が何と言はうと、意に介せなかつた。然し彼女がステフアヌ●アヂャスー●ド●グランセイニユといふ靑年と友達になり、此人から動物學、解剖學及生理學を習つたが、近所のラ●シャートル町の交際社會から惡く解釋されて、除け者にされた。彼女は自ら何等疚しい所がなかつたので、大に激昻し、社會的關係を律する原則を罵り、一擧にして、今まで持つてゐた宗敎的信仰を失つてしまつた。

結婚

一八二一年には祖母が逝いたので、母はオーロールを巴里につれて來たが、未來の大小說家は徒らにしやれ者であるその母と氣が合はず、巴里に程遠からぬムラン附近の友達の家に數月ゐるうちに、カジミール●デュドヴァンと知己になり、一八二二年九月十八日ノアン村で彼と結婚した。この時彼女は十八歲であつた。

夫はつまらぬ人で、氣荒く、暴君的であつた。それでも初め二年間は本性を露出しなかつたので家內多くの風波を見ず、一八二三年六月卅日に男兒モーリスが生れた。オーロールは自らこれを育て、非常にこれを愛した。そのうち夫はとうと本性に還つて、或る日何でもない事で、多人數の前で、彼女の頰を打つたので、彼女はモーリスを抱

いて、夫と別れた。

これから後彼女は反動的にプラトニック戀愛といふ高尚な快樂を求め、一八二五年ピレネー地方旅行中、青年辯護士オーレリヤン・ド・セーズと知己となり、お互に敬意を持ちつゝ愛し合ひ、爾來愛情に滿つ音信を交換した。然しオーロールはその夫と全く別離せず、一八二八年には女兒ソランヂュが生れたので、セーズは悲觀し後にはオーロールと絕つことになつた。

デュドヴァンの品行は次第に惡くなり、來る下女を片端から誘惑するので、オーロールは病氣に罹つた百姓を介抱したり、小箱や扇子、煙草盆に畫をかいたりして自ら慰めんとして、得ず、失望の極、暗黑な悲觀に襲たれ、遂に一八三〇年には卒倒したので、翌年正月四日ノアンを去り、巴里に移つた。

巴里生活

巴里では多くの青年と知己になり、オーロールは狂奔的に書生々活を行ひ、男裝して夜中の巴里に出ることが多かつた。そして資を得るために、筆を取り始めた。初めはフィガロ新聞、『巴里評論』『モード』などに寄稿した。しかも彼女は夫と通信を斷たず、その巴里生活の有樣を詳しく書き送りながら、同鄉出身の青年ヂュール・サンドーの情婦となつた。彼女の說に曰く『私の夫が行使してゐる大自由は相互的(英語でreciprocal)でなければならぬ、さうでないと彼は私に醜く且つ侮蔑さる可きものとなりませう、それは彼の斷じて欲せない所です。かるが故に私は全く獨立してゐます』

彼女は初め情人と協力して執筆したが、軈て一人でヂョルヂュ・サンドの名の下にアンディアナ(一八三二年)ヴァランチーヌその他思切つて大膽で特色のある創作を出し始めた。一八三三年サンドーは洗濯屋の女と通じたので、ヂョルヂュは彼を捨て、マリー・ドルヴァルと結んだが、これでは更にひどい目に遇つた。そして一も二もなくメリメーと情交を結んだ。

註、メリメー(一八〇三——一八七〇)は十九世紀中葉の文學者で、コロンバ　カルメン等の著作がある、然し總體に於て、その文學的價値はヂョルヂュのそれの下位に立つやうに思はる。

メリメーは本氣になつてヂョルヂュを愛することは出來なかつたので、數日ならずして、彼女は絶望の聲を放つた。彼女は自殺せんとも考へたが、思ひ直し、婦人の諸權利と男子の墮落とについて復讐的精神で、猛烈なことを書いて自らを慰めたそれが有名なレリア（Lelia 一八三三年二冊）である。これは當時全歐洲殊に獨逸に深甚な反響を反ぼし、世評頗る喧しかつた。

アルフレ・ド・ミユツセー

此頃ヂョルヂュの友人には數多の名士殊にサント・ブーヴとフランソワ・ビユロズがあつた。

註、Sainte—Beuve（一八〇四——一八六九）は佛國第一流の文藝批評家 Buloz（一八〇三——一八七七）は有名な「ラ・ルヴユー・デ・ヅー・モンド」（兩世界評論）の創立者で、四十六年間その主幹であつた。

ヂョルヂュは或日ビユロズが全世界評論寄稿者達のため開いた晩餐會で、アルフレ・ド・ミユッセーと邂逅し、彼等は巴里のケー・マラケーの小さな部屋を借つて、そこに同棲した。

Musset（一八一〇——一八五七年）はローマンチックの大詩人で、悲痛な性分であつたが、才氣潑溂熱情に富み、戀愛を謳歌して、青年子女の血を湧かした。彼には詩集「伊太利、西班牙物語」「諸夜」「ロラ」などがある。又散文「此世紀の兒の懺悔」は彼の自叙傳で、彼とヂョルヂュ・サンドとの關係が詳しく書いてある。

兩情人は天禀を略ぼ同うし、且つ共に文學者であつたので、その戀愛はお互に煩悶反省に富むものであつた。一八三三年十二月有名な伊太利旅行を企てた。然るにヴェニスの大運河に臨み、サン・マルコ寺に遠からぬ「スキアヴォニ海岸通」の或る宿屋にゐる間、ミユッセーは震戰性譫妄症に罹つて、伊太利人醫師パゼロから癒して貰つたのはよかつたが、ヂョルヂュは此醫者を愛するに至つたので、詩人は絶望悲嘆、巴里に歸り、それから彼とヂョルヂュとは再び結んだり、又別れたりしたが、結局一八三五年三月には永遠に別れてしまつた。兩人共その心に大打擊を受け、殊にミユッセーはその心に最早癒し得ぬ大瘡痍を負つた。それからヂョルヂュはミシェル・ド・ブールヂュと通じたが、これは永續きはしなかつた。

これまでヂョルヂュとその夫デュドヴァンとの間は合意的離別で、無事であつたが、一八三五年

ヂョルヂュが大に怒る事が出來て、彼女は『重大な侮辱、虐待……』の故を以て、ラ●シャートル區裁判所に正式離婚の訴を出し、彼女の勝に歸した。

ヂョルヂュは瑞西旅行の後、巴里ラフィット街のオテル●ド●フランスに居を占めたが、そのサロンには當代の文藝界の大人物、大ピアニストたるフランツ●リスト「Liszt」女流文學者ダグー夫人、佛國の思想家ラムネー、獨逸詩人ハイネ、波蘭の詩人ミッキエウィッチなどは、しばしばこれを訪づれた。

ショーパン

一八三六年ヂョルヂュは波蘭の大作曲家ショーパンと情交を結び、ためにダグー夫人との折合が惡くなつたので、ノアン村に歸つた。村は忽ち哲學者、文學者等の集ひ所となり、彼女はこの人達と徒歩又は乘馬で散歩したり、音樂會や戯曲上演で賑つた。此間ヂョルヂュの母逝き、娘ソランヂュを前夫から取らるゝの不幸があつた。一八三八年には大小說家バルザックの訪問を受けた。バルザックの印象記の一節に曰く『彼女は男子の諸性格を持つてゐる、したがつて彼女は女子ではない』

一八三八年十月彼女はショーパンと共にマヂョルカに避寒に出かけた、大作曲家の病態が益惡くなつたので、ヂョルヂュは非常の親切でこれを介抱した。翌年ノアン村に歸來して、爾來そこに落付き、時々巴里に出かけ、當代の名士を集めた『マニイ晩餐會』に好んで出席した。

彼女とショーハンとの關係は一八四七年まで續いたが、以後は質朴な田園生活、家庭生活に日を暮し、同時に從前通り著作に從事した。詩人で美術批評家であるテオフィル●ゴーチエ、寫實主義の大小說家フローベール、劇作家デュマなども來訪した。

ヂョルヂュは母としては、その子孫にモーリスを熱愛し、極極めて周到な注意、深い愛情で育てた、但し元來熱情的なヂョルヂュの事とて、愛に溺るゝ嫌ひがあつた。

彼女は思想上には社會主義であつて、田園生活の間に、百姓連に同情して、これ等と最も親んだ

されば理想主義的な、社會主義的な一八四八年の革命を雀躍りして喜び、巴里に於て、彼女は文筆の力を以て、人民を激勵する檄文を起草して毎日奮鬪した。

その後彼女の生活は母として、著作家として送られ、彼女の傑作の大部分は此時代に出來た。

彼女が一八七五年ノアン城で永眠した時、碩學エルネスト・ルナンは言つた『今後我等の合奏會には何物かゞ缺ぐであらう、此世紀の抒情琴の一絃は切れた。』

註、彼女には多くの創作と戯曲とがあり、一々それをこゝに擧ぐるわけには行かぬが、その主なるもののだけを記すと、上記女性問題に關するものゝ外に、一八四〇年頃から一八四七年頃にかけて、社會主義的傾向の諸小說殊に「ル・コンパニヨン・デユ・ツール・ド・フランス」「コンシユエロ」があり、田園戀愛小說には「魔ヶ池」「小女ファデット」「フランソア・ル・シャンピ」が一般に推賞せらる。一八五〇年以後は彼女の作風は平淡になり、以前の如く猛烈に結婚の社會的不正義とを攻撃せなくなつた。即ち一八六〇年代には「ラ・カンチニー嬢」「ヴイルメール侯爵」などが好評を博したが、これ等は加特力教僧侶排斥の意味を持つてゐた。

ヂヨルヂユ・サンドの生涯及び思想については、自敍傳「イストアール・ド・マ・ヴイ」(一八五四――一八五五年出版二十卷)「彼と彼女」(一八五九年)書翰集(一八八二――八六年出版六卷)などが主な資料である。

サンドに關する著作、論說は夥しいが、こゝには單にルネ・ヅウミック(Doumic)氏の「ヂヨルヂユ・サンド」(一九〇九年出版、尙一九一〇年 Alys Hallard によつて英譯された)最も近くマリー・ルイズ・パイユロン夫人が、一九二一年度の兩世界評論の數號に亘つて、ヂヨルヂユとビユロスとの文學的關係につき、多數の書翰を基礎として、研究を連載してゐる。

變化しつゝある女性の地位

ハヴロック・エリス

今此處に、これらの傾向が、如何に廣般に男性に影響するかといふことを指摘するのは、我々の目的ではない。けれども、併し女性の狀態に關係する何等かのものを示すことは、價値あることであらうと思ふ。古い狀態の下に働いてゐたところの婦人から、本當の製造工業が、手工を奪つてしまふと同時に、益々負擔が增加して行くところの不必要な職業が、强制される樣になつた。古い共產的組織の下に、大家族の者が、一つの大きな家に住んで居た時には、婦人は、家政を司るために協同し、炊事は共同の火でなされたのである。彼等は、子供の時から一緒に育つて來、そして共同といふことは、何等の軋轢なしに行はれることが出來た。婦人が、凡ての必要な家政的仕事を、殆んど分業といふものがない最も不經濟な方法でなければならなくなり、それに加ふるに、僅か一時間か三四十分足らずの時間で、小さい家の部屋を掃除するといふ簡單な仕事をすることすら出來ない樣な、傳統的な或は又世間的な習慣に隨つて、多くの不必要な仕事をしなければならなくなつたのは、其の後に現はれた組織の結果である。

どんな人間でも、こんな狀態にあつては、理想的な健全な生活をすることは、不可能なことである。普通の家政的仕事をして居る婦人は、炭坑に働いて居る坑夫よりも、健康に適する生活を營むことが困難である。何故なれば、少くとも坑夫は彼の仕事がすんだ後には、二十四時間の內の三分の二だけの彼自身の時間があるのである。然るに婦人は、逃げられさうにもない無數の小さい糸をもつて、結びつけられて居る。彼の女は、狂ほし

い程の努力を以つて、幾度か逃げ出さうとして居るけれども、何時も無數の糸の結合した力の方が餘りに強い樣に思はれる。現在の家政組織が滅びるといふことは、何等疑ひのない事である。卽ち婦人から要求されて居るところのもつと高い程度の智識、家內經濟の問題に關する興味の成長、勞働聯合の運動、生活上の野蕃的混雜に對する反抗——これらのすべて、卽ち大なる經濟的革命の徵候が、新らしい時代の近づいて來て居ることを、示して居る。

女子の敎育は、我々が現在考へて居る、大きな運動の根本的なものゝ一部分である。我々は過去に於て、我々の男子を敎育しなければならなかつた樣に、又我々の女子をも敎育せねばならないのである。敎育の缺除のために、如何に婦人が苦しんで居るかといふことは、指導者といはれて居る樣な人々の間にさへも、今なほ、見られるであらう

いづれの過渡期に於ても、度はづれの行爲といふものはあるものである。より健全な狀態をもたらすに、力づよい一要素となるものは、少年少女の共學といふ事であらう。小さい時分のお互の交りを缺くといふことは、目的や理想の不自然な相違とか、隨つておこる同情の缺乏とかいふものを幇助するのである。もしも兩性か、互に了解しようとし、そうして相互に温い心をもつて、お互の性情を理解し、又は誠實な友達になれるやうにしようとするならば、その礎は幼年の時分に置かれなければならないのである。男女の共學により助長される他の有益な改革は、婦人の體育上に於てゞある。男子の場合に於ては、體育といふことに就いて、一般に特別の注意が拂らはれてゐた。そして、その體育の缺乏は、實に屢々婦人を妨げて居るところの慢性の不健康を來たす多くの人爲的原因の一である。婦人も亦男子と同等の敎育を受けなければならない。何となれば、たしかにそれは善い事である。併しながら、今日の男子の敎育は、模範とされることはできない。而して徐々に行はれる共學は、多くの健全な改革をなさしめるであらう。若しも兩性間の親しい交際が、武士道の不健全な理想のなごり——それによれば、女性

は天使と白痴との雜種としてとりあつかはれて居たのであるが――を滅してしまふならば、それは喜ぶべき事實である。男性と女性とが互に面をあはせるところには、何處に於ても、性的本能が常に一つの適はしい理想の後光を保證するであらう

　結婚の最も勢力ある標式は、賣淫と同樣に經濟上の顧慮に基いて居るのである。婦人はしば〲主にその生計を得るために結婚する。こゝに於てか、我々は確かに大きな變化を期待するであらう我々は、不合理な放縱を一方に、同樣に又不合理な節制を他方において、社會上の平均を確保することを、永い間求めて居た。ひとり婦人の經濟上の獨立こそは、兩極端を不必要になすことに努力して、兩性の關係を健全な自由な礎の上に置くことを得るのである。

　國家の結婚法規は、無論社會の進歩に大切な役目を演じて來たのである。併し現今に於ては、その人爲的の取締りの利益はもう、あまり明白ではなくなつた。婦人が經濟上の完全な獨立に達した場合には、その利益は全く消え失せるであらう。兩性間の友情や或は又性的關係に關する經濟上の動機に邪魔になる人爲的な墻壁の消失によつて、兩性は共に何の妨げも受けずに、社會の高い文明の狀態に入りこんで、適當な配偶者を自由に探すことを得るであらう。

　この避け難い變化は、幾分かは個人の任意な行動により大部分は、一時まに合せの不器用な徐々の方法と、より自由な離婚の法律とによつて、おこされるだらうといふことは、ありさうな事である。後者の原因から來る、國家の規定した結婚の遲々たる崩解は、近時アメリカ全體に於て認められて居る。彼の地では、全體として、離婚がしば〲且つ容易に發達した傾向がある。性的關係はそれが子供を生じない限りは、社會は社會としてそれに何らの關係をも持つて居ない。併しそれが一度婦人の姙娠といふものを起すや否や、社會は直にそれに關係を持たせられる。この點に於て、その關係を登錄するといふことは、明かに國家の義務である。

地位のこの變化が、それに向つて導きつゝあるところの兩性の平等といふもの〻種類は、社會的の平等、いひかへれば、自由の平等であるといふことを記憶するのは、必要な事である。それは智的平等のことではない。男女は彼等が體格と生理上の機能が同じである場合に於てのみ智的にも亦相等しくなることが出來る。婦人に於ては、妊娠と授乳期の永い期間と、その子の長い間の賴りなさとが、彼の女の餘程の期間を經濟的に從屬なものとするのである。然らば、誰に彼の女はたよるのであらうか。これは非常に重大な問題である。家族といふものに對する昔の觀念にしたがへば、家庭の全員はその持主のために生產するところの奴隷であつた。そして妻は、その夫の使用のために奴隷を生產する時は、彼によつて養はれることは自然なことであつた。併しこの觀念は、我々がすでに承知の樣に、もはやふさはしいものではない母親に彼の女の以前の働に賴ることを强ひるのも亦明らかに不公平である。民族の生殖は、社會的の職務である。そして我々は、妊娠した人が、社會的の働きをなしてゐて而も自分を養ふことが不可能な場合に、その人を養つてやることは、社會の義務であるといふ結論を我々は强ひられる。

妊婦とその子供の世話は、現在では個人の處置する問題として繼續するであらう。それが今日よりもずつとよく處理せられることを、我々は合理的に希望するのである。一方に於ては、產兒が輕卒に增殖せられるといふことは、おそらく制せられるであらう。他の一方に於ては、多くの婦人はもはや、母たることから除外せられはしないであらう。國家が出產率の整理をなすといふことを、我々は殆んど望むことも豫想することもできないのである。無論社會は、その人員の數を制限する無形の權利を有してゐる。併しながら、人生の合理的な條件の下に於ては、その過程はおそらくは自個整理であらうといふことが指摘せられるであらう。人類の内に於ても又同樣に動物間に於ても子供を多く生むといふことは、進歩につれてなくなつて來た。併しながら生殖といふことは何處に於ても、あらゆる生命の目的でありそして人間的

な完全な人生を生きるためには、すべての健康な婦人は、單に性的關係を結ぶといふのみではなく、その生涯に於て少くとも一度は母性の崇高なる職能を行ふべきであり、そして只母性のみが與へることのできるこれらの經驗を有すべきである。勿論それは、我々が向つて動きつゝある社會狀態に於ての自然な合理的な生存の主張である。

未來に於ける社會組織を論ずることは、私がすでに定めておいたところの範圍の外に出ることにならう。そして之れは確實に話すことのできない物にもふれることになるであらう。明るいかくしだてのない氣分の中に於ける婦人の新らしい教養は、今日に於ては我々に暗いところの多くの事件を解決するであらう。古典的文明の急激な衰亡をきたしたところの女性の進歩は、ギリシヤ人やローマ人の失敗であつたといふことを、モルガンは假定して居る。將來の婦人は、藝術や科學を、生命と同じく新にしてゆかねばならぬ。又彼等はこれらよりもつと以上のことをせねばならない。何となれば、人類の運命は婦人によるところが多いからである。ホイットマンは、彼の民衆的豫想といふ著書の中に、次のやうにいつた。「改造せられた社會に對する唯一の道と方法は、第一に婦人の新たに生れた高尚と擴張と活氣とであるといふことを私はしば〱考へてゐる」と。その直觀は健全な根據のないものではない。そしてもしも大きな歷史的の運動が認容を要するならば、それはここで充分であらう。（K・K抄譯）

或る月の夜の話

網野菊子

それは遠い昔のことだ。

私は母と二人で、とある町を歩いて居た。なんでも月の冴えた寒い晩で、二人は袖をかい抱いて居たことを覺えて居る。

町はだゞつ廣い電車通りで人通りも少なく、其處此處に煙草屋や駄菓子屋の電氣が暗く光つて居た。母は同じ道を行つたり來たりして居た。私も母のそばについて行つたり來たりして居た。そのうちに母はつと向ふ側へ線路を横切つた。私も後から横切つた。

母と私は暗い横町に入つて行つた。左側の路次の入口に「、、、」と書いた四角い軒燈が高く掛かつて居た。其の路次を入つて行くと突當りに料理屋があつた。

「いらつしやあい」と言つて女中が出て來た。その女中に母が何か言ふと、女中は頷いて先に立つた。長い廊下を幾つも折れて家の隅のやうな一室に二人を通した。

障子を開けて中に入ると、其處に一人の男が坐つて居た。男は私達が入つて行くともぢ〱して赤い顔をした。母は其の男に向きあつて坐つた。私は母にくつつくやうにして坐つて居た。

その室の庭をへだてた向ふの部屋から、大勢の書生の騒ぐ音がして來た。誰か一人特別に大きな聲で其の頃流行つた劍舞のうたをどなつて居た。

私は變に淋しい、悲しい氣がして來た。何か冷たい黒いものが室の中にかくれて居るやうな感じがしてならなかつた。だまつて母の膝にもたれて其の男の顔をぢつとみつめて居た。

「……ちやんはおねむだらう？　歩いたりして草

臥れたらうから、お眠り。ね、かうしてお母さんの膝におつむをのせて。早く眠らないと、ホラ、あんなに書生さんが大勢騒いで居るだらう？　あの書生さん達が今に此處に來るからね、早く眼をつむつて寢ておしまひ」丁度其處へ先刻の女中が火を持つて來た。

「ねえ、姐さん。あの書生さん達は恐いんですね寢てしまはない子を探しに來るんですね」

母が云ふと、女中はお愛想笑ひをして、

「さうですよ。お孃さんは好いお子さんですから直ぐおねんねなさいますね」と言つた。そして間もなく出て行つた。

「お眠り。さうしないと、先刻のねえさんに頼んで、あの書生さんを此處へ呼んで來て貰ふよ」

母は少し恐い顏をして私に言つた。男は默つて其れを聞いて居た。私は一層淋しい、賴りない氣がして來た。一心に眼をとぢて眠らうと思つた。母は默つて私の樣子を見て居るらしかつた。そのうちに私は本當に睡くなつた。女中がまた入つて來た。

「オヤ、お孃さんはもうおねんねですね。お早いこと。お蒲團を敷きませうか？」と女中が言つた「いゝえ、もう少し此の儘にして置きませう」母がさう答へて居た。私は、まだ眠つてやしないのにと思ひながら聞いて居たが、やがてうと／＼と寢入つてしまつた。

眼を覺すと朝だつた。私は自分の家の六疊の間で、いつもの朝のやうに目覺めたのだつた。あかるい日光が室の中に一杯になつて居た。臺所の方で母のほがらかな笑ひ聲がして居た。

私は昨夜のことを思ひ出して不思議に感じた。夢だつたのかしらと思つた。床の中で一人で考へて居ると、母が入つて來た。

母は昨夜のことは一言も言はなかつた。私をうながし立てゝ着物を着かへさせた。私も默つて御飯を食べると、いつもの通りに、おもてへ遊びに出掛けた。

自分にきかす

高岡成子

みづからのすがたもて立つをおそる勿れと自分にきかす。
一つの魂全世界より尊しとおもふそのことの力よ。
かゝる氣持誰にかたろうべくもあらず自分の中に自問自答す。
何によりてこの淋しさにたえむ何物もなしとしる程の淋しさ。
人生は解かるべからざるものなりといふ考へ方に氣をやすめる日。
さうでないと思へど口に出さざりし我を友は何と思ひをらん。
そのはじめ豫感せしかの人のこともつひにこの日まことゝなりぬ。

女の悩み

椙本まさを

私は現在では神が信じられない、然るに神を信じないでは、一夜も安じて寢られないやうな氣がする。仕方がないので、その諸々の煩悶を失くする爲めに、

「南無大悲大慈の觀世音菩薩。觀世音菩薩」と兩の掌を合はして、一心に合掌祈願する。するうちに眠たくなつて寢て了う。何かまた煩悶が起つて來ると、かうやつては合掌する。救はれがたい私は一心になつて合掌するけれども、些とも心は輕くならない。冷たい、淋しい、怖ろしい悲しみは、あとからあとからと湧いて來る。

「神を信ずるよりも、人を信じやうか知ら、神、即人、といふところに行けば、それが即ち救はれたといふのではなからうか」かう私は思つてみるけれどもいつもそれは實行できない、人間の惡がまざ〳〵と目に付く。信じやうとしても些とも信じられない。

「神を拜む代りに、人間を拜まうか、人間の悲しい心を拜まうか」と折々思ふ。いな時々拜んで見る。

いろ〳〵と親しい心を見せて、むかうに取つても利益なことを言つて、而して何か依賴んでおいたのに、數日になつても返事をよこして吳れない焦れられて耐らない心がする。腹が立つて耐らない、悲しくなつて耐らない。憎惡が心に燃えて來る。あんな人間にものをたのむのでなかつた、と思ふ。又人間をたのむやうな不純な心に何うしてなつたのだらうと自分を憎々しくおもふ。

けれども考へて見ると、その返事をよこさない人にも、私の依頼をきいてゐられない何かの悲しみがあるのだらうと思ふ。いな私の依頼が不當のために、少なからず惱まされてゐるのであらうと思ふ。あゝ氣の毒なことをした、徒らなことをたのむのでなかつた。あの人にも嫌な嬉しからぬことをひとつ爲せたと思はずにはゐられない。

私も弱いが、あの人も弱いのだ、私も小さいがあの人も小さかつたのだ。その小ささを怨んで何うなるであらう、その弱さを憎んで何うなるであらう。氣の毒なことをした、と私は思つた。謝つてやらうと私は思つた。

◎

O女史はいつも冷默して何かを考へてゐるやうな人だ、私はこの人の心の悲しみをその沈默の中から、泌々と味はされる。この人の口から折々、「日本の女はまだまだ、何うにもならないね」と心から嘆息したやうに言うのをきく。私はこの一言を伏し拜んできゝ度いやうな氣がする。

私達は小さい、弱い、愚かだ。嘘つきだ。見榮坊だ。威張りたがりやだ。疑ぐりやだ。何うしてこんなものが救はれるだらうか、といふやうな氣がする。

ある一人の女が嘘つきで、Oさんもある人も少なからず迷惑をした。Oさんは、

「本當にあの人には困つた。何しろ信じられないことを言うのだから、どこまで本當だと思つてゐたら好いのか、困つて了う」といふ。

一體どんな人だらうと言つて、Oさんと私は、その人について種々と事實を並べて考へて見た。すると結局、惡氣はないのだけれども、一寸法螺を吹く人だといふことになつた。何故そんな法螺を吹くかといふことになると、矢張りそれは私達女の特有のヒステリーといふことになつた。

あゝ怖ろしいヒステリー、悲しいヒステリー、情けない、救はれないヒステリー。しかしそれが私達何千萬といふ女の特有のものではないか、女それ自身ではないか。

今日はあの女のヒステリーで惱まされたが、明日は私のヒステリーで人を惱ます。何といふ怖ろ

しいヒステリーだ。

◎

ある女が虐げられた。しかしその虐げた男は、はじめつから人を虐げた男であらうか、いな恐らくは、その男も何者かに、嘗ては虐げられた男であつたであらう。虐げられた女も耐らないであうけれども、虐げねばならぬ男も耐らないであらう。淋しいであらう、哀しいであらう。苦しいであらう。

淋病の男は、その本能が止められないといふ。病氣になるまでよりも、病氣になつて後の方が耐らなく性慾が亢進するといふ。しかしその病氣も元は矢張り女から移つたのだ。その女も元はある男から、そのある男はある女から、その女は又ある男から。

私はある時一人の醫者をつかまへて、

「花柳病はどこから來たのです?」

と用意もなく、馬鹿みたいな顏をして訊いた。

「さあ、造物主だね」

と言つて醫者はにつと笑つた。然らば淋病菌を造物主の賜物として合掌することが出來るであらうか?

しかし私はある日京都の西田氏の懺悔録を讀んだ。その中にある宗教家が、肺病患者の許に行つて、信仰談で夢中になつて、患者の痰の吐いてある茶碗の湯を知らずに呑み下して了つたが、それを見たその患者は翌日から俄かに病ひが治りはじめたとかいてあつた。人の痰すら呑む人がある。まして自分の軀の中の黴菌を恐れてゐて何うなるだらう、とでもその患者は思つたのであらうか。私はその宗教家の信仰を伏し拜みたいと思つた。

◎

人の心に神が住んでゐるといふではないか、して見れば人の軀は神の殿堂だ。先づ私達は最もてぢかなる人そのものを拜んでよいのではないか、神のすめる殿堂の人間よ。

けれども伏し拜めない、なさけない心よ。

◎

一本のダリヤにある日花がさいたといふので、この夏大騒ぎをして喜んだ。一本の花をすら愛す

ることの出來る私達が、何うして人間を愛することは出來ないのであらう。ロダンは女と花とをたとへてゐた。又モデル女が着物を脱ぐ時、その立派さは太陽が雲間から現はれるやうだといふ。偉なる藝術家の眼には、女の軀も亦太陽の美に見えるのであらう。私達の小さい眼には、私達女はたゞの醜い野獸の如きものとして映る。

◎

「貴婦人達に何が出來る。虛榮心の凝りの貴婦人達」といふ言葉を私達は度々きく。それは如何にも然うだ。けれども私はあの華麗なる高樓に棲む貴婦人達の悩みがよく感じられる。あらゆる物質の榮華に包まれたる牢獄の中に囚はれたる貴婦人の悩みがよく分る。花柳病に包まれて終夜苦しむ賣春婦の痛ましさは、榮華に包まれたる貴婦人の心の苦痛と同じものである。異なるところはたゞ物質、境遇のほんの外皮の異ひだけである。等しく女としての悩み、煩悶ではないであらうか。小さく、弱く、救はれぬ苦しみではなからうか。

◎

觀音樣を描くよりも、觀音三昧をした方が好いといふ西田氏の言葉は貴いと思ふ。しかし、せめて觀世音菩薩でも描かねばならぬ人の苦痛、哀しみを味つて貰ひ度い。

◎

私の一人の友人が、ある日やつて來て、良人が死んだあと、身の置きどころがなくて、仙臺のある禪寺にまで、順禮姿で辿りついた。そこの和尙は非常に立派な人で、いろ〳〵と無言の敎へを授つたが、その弟子の一人に思はれて、その誘惑にたへられずに歸つて來たと言つた。

女であるが故に、最後まで忍ぶことが出來なかつたのか、忍ぶことが出來なかつたが故に救はれることが出來なかつたのか。

その禪僧にとつては、この女が得道の碍りであつたし、この女にとつてはこの禪僧が罪碍であつた。あゝ怖ろしい、と私は思つた。いな、この友人の懺悔は、私にとつても過去の體驗であつた。私は廿一の齡に、ある戀の失敗から、敎への門に入つた。私は夜も晝も熱心になつてその有難い宗

門の話をきいた。師は得がたい女弟子を手に入れたと思つたか何うか、その師の淨き寂光を說く唇からは、いつの間にか愛慾の言葉が洩れてゐた。私は今あの師と結婚してゐたならば、果して何なつてゐたであらうと思ふ。私はとう〳〵この師を捨てゝ逃げた。

その時の私は一心に佛に歸依する心はあつたけれども、この師を愛する心は持たなかつた。いな最初は愛してゐたけれども、あとになつて、迚も忍ぶことが出來ない位ゐに嫌惡を持ちはじめた。

あとで考へると、私に敎へを說いてゐた頃の師は至極圓滿な修道者であつたけれども、私の愛慾に墮落しはじめてからの師は、本來の醜惡な人間性そのまゝの赤裸々な人になつてゐたのであらうと思ふ。私は迚もこの師を愛することは出來なかつた。のちに至つて人からきくと、師はそれからのち更に信仰は深められて、今ではある寺の住職として、まれに見る人格者として認められてゐるといふ話しであつた。私の非道な背恩は、師にとつて最も得がたい善智識で、師の愛慾は私にとつて最も怖しい地獄の門出であつたとは誰が知らう

翻つて考へると、愛されても女なるが故に救はれることは出來ず、憎まれても男なるが故に救はれたのであらう。私は今もこの師を心から許すことが出來ない、早く、一日も早く許す氣持ちになり度いと思ふ。

私は友人に言つた。

『その坊さんを憎まないでゐらつしやいね』

友人は笑つて、

『坊さんを愛したら、私は墮落するわ』

『いゝえ、逃げて來たのだから、今なら心の中で愛してやつても好いわ』

『けれども私を獸慾の對照として見たのだから、私もあの坊さんを人間とは見られない』

而もその僧は、めつかちで、聾者だと云つた。

その友人の良人は藝術家で、死ぬ三時間前に、

『俺はもう二時間か三時間目に死ぬ。今の間にきゝ度いことはきいておくが好い』

と言つたとか、神のやうな美しい靜かな死におちて行つたその良人の一生を考へると、その友人はとても第二の結婚生活には入れる筈がなかつた

その良人を戀ひて泣く涙の多ければ多いだけ、女の涙に饑えかわく男の心は餘計に惹きつけられる。あゝ、この友人も惱み多い一生を送らねばならないと思つた。

――十二月廿日夜――

米國より

シヤートルにて

市川房枝

協會の理事諸氏へ差上げる手紙と、雜誌への通信とを一緒にして、思ひ出すまゝを記してみます

私の此度の旅行に際しまして、會員及讀者の有志の方々から金八拾五圓五拾壹錢、協會から金拾四圓四拾九錢いたゞきまして有難う御座いました。出發の前夜佐々木氏から確かに受領致しました。會員及讀者の方々へは、それ〴〵金額記入の上御禮狀を差上げておきました。

尚私の在任中は、一方ならぬ御厚情にあづかりまして有難う厶いました。會員及讀者の方々を初め役員の諸氏に厚く御禮を申上げます。特に私故に御迷惑を御かけした向々へは、此際改めて御詫びを申上げておきます。

七月の廿九日に横濱を出帆いたしましてから、まる十六日間大洋を航海して、去る十三日夜上陸致しました。海上は近來にない平穩さでありましたが、大陸に近づいてから濃霧に閉じこめられた爲めに、豫定より二日おくれました。

船の中でも色々なヒントを得ましたが、上陸してすぐ移民館に一晩放り込まれて、いゝ經驗を得ました。委しくは他の雜誌に書いてみやうと思つ

本通りの梗概

昨秋出た米國小説のうちに、シンクレヤ、ルイスの「本通り」程、賣行の盛なのは恐らくあるまい。其精練された筆致、其こまかい觀察、其心理描寫、其含んでゐるさま〴〵な現代の問題など孰れもこの小説の評判を高めるに役立つたに相違ないが、特に我々の興味を唆るのは、其主人公が、稍現代を理解し、其理想を幾分でも此世に實現せんと努力しても、環境が存外頑なで施すに術なく折角の個性は傷けられ空しく田舍町に埋れんさする悲慘な境遇が我日本にも世界到る處にも見出される悲劇の代表であろかの樣に思はれるからである。この小説は女をいかにも弱いものさ寫してゐる。（男は更にひど〳〵描かれてゐる）どの女もどの女も遍見や滑智や、自慢や、嫉妬や、饒舌や虛榮やありふれたさま〴〵な弱點を暴露してゐるし、主人公其人さ雖も別段立優れた婦人とは見えない。唯其教育の結果としてけなげにも自己存在の意義を見出さんと努めたにすぎぬ。其結構からするとこの小説は現代の傾向としてあまり筋のまとまりに氣をつけず、又アメリカの多くの小說の樣に別段大きな一の問題をつかまへたり、或は豫言者的な解決を現代に對して與へたり何かしてゐない。此書のペタ付に刷られた細字の四百五十頁の内には、一杯に社會調和が盛られ、世を笑ふ著者のシンシズムが現はれてゐるかと思はれる。

キヤロルといふ本篇の主人公は、シンアポクス市、米國ではシカゴ以西の大都市でセントポール市さミシシツピ河を挾んで相對し

でゐますが、期待しない好い獲物でした。

今迄の仕事の關係から已むを得ないでせうが、私の此度の渡米があんまり公になりすぎてしまつて、實は恐縮して居りますが、こちらへ來てもすぐ邦字新聞社の人達につかまつてしまひました。然し別に强いて逃げ隱れするにも及びませんので、來られゝば面會し、賴まれゝば書いても居ります。

當地には大北日報と北米時事といふ二つの邦字新聞がありますが、その大北日報の方から是非協會の事を書いて吳れと賴まれました。斷るのも穩當でないと思ひましたので、少し潜越でしたが、初めからの事を七回に亘つて書きました。新聞紙は別便を以て御送りいたしましたから御覽下さいませ。豫め私と現在の協會との關係を述べて責任者としてではない事を斷つておきましたが、若し間違つて居る所がありましたらお許し下さい。

私の其原稿は、三四日過ぎてから桑港の日米に轉載されてゐるさうです。日米といへば在米の邦字新聞の中では一番勢力のある大新聞なのですがそれならも少し落着いて丁寧に書くのであつたのにと思ひましたが、もう追付きません。御許し下さい。

こちでも協會の事は實によく知られてゐます。

てゐる。其ミ市の女子大學を卒業して、セントポールの公立圖書館に勤めて居たが、さすが新英州の教養ある法律家の娘の事とて現代のあらゆる問題に興味を有ち　所謂眼覺めた、聰明な快活なそしてかなり常識を備へた女であつた。ふとしたはづみに醫師ケニコットと結婚してゴーファー、プレヤリと稱するある田舍の市に居住する事となる。これはキャロルが豫て都市改善の理想があつて、大都會よりも田舍の淳朴を愛し、自分の理想を實現するには田舍の方が容易だとばかり想像して居た所へ丁度今後の時代は科學が世を救ふとの考も手傳つて、折から田舍から上京中の醫師濟生の科學者都市改善の理想、婦人として正に好適な天職と、こう聯想が夫から夫へと働いたのであつた。

ゴーファー・プレヤーには幻滅が待つて居る。米國西部の所謂プレヤリと稱する大荒野の一部に散在する一都會として、市とは自稱するけれど實は一本筋の本通りの外りは、何等視るべきものもなく田舍町の常として、住民の話題に上るのは農作の好惡位が關の山、日夜隣同志の會合に日を暮して、未だに珍らしい事としては汽車の發着の度度に停車場で仕入れて來る外界の噂さ位であつた素より他國者のキャロルが市廳舍の醜惡を訴へても、學校の不備を唱へても、救濟事業の急を叫んでも、土地自慢の商人共に手答がない。この狹い天地に唯一つサナトプシス倶樂部とて、婦人の文化修養を目的とするある會のあるのを賴りに、此會員なら少しは自分を理解して吳れるかと思ふと、是亦、中流無能者流の團體とて、キャロルを過激派扱ひにする。キャロルが唱道する樣な職業紹介所や、嬰兒健康診斷所や、市營住宅建設案などは、結構に

日本の新聞や雑誌に出たものは、何でも此處まで傳はつて來てゐます。全く驚く程です。

私の此度の記事も大分影響を與へたさうですが、こんな事を見聞きすると、[illegible]人[illegible]といふもの[illegible]責任の重さを思ひます。

私が來る前も[illegible]から[illegible]少し評判だつたさうです[illegible]て、ぞんがいその[illegible]でアメリカの水で顔を洗つて[illegible]りましたが[illegible]やうです。

然し[illegible]いでゐますから[illegible]下さい。

去る二十四日ワシントン[illegible]おひました。[illegible]權の[illegible]の[illegible]りしました。[illegible]

此度の[illegible]向來る時[illegible]い方い[illegible]

[illegible]

は違ひない。我々の關係した事でもないと[illegible]するものも[illegible]會員の一人[illegible]

[illegible]

でゐますが、期待しない好い獲物でした。
今迄の仕事の關係から已むを得ないでせうが、私の此度の渡米があんまり公になりすぎてしまつて、實は恐縮して居りますが、こちらへ來てもすぐ邦字新聞社の人達につかまつてしまひました。然し別に強いて逃げ隠れするにも及びませんので、來られゝば面會し、頼まれゝば書いても居ります。

當地には大北日報と北米時事といふ二つの邦字新聞がありますが、その大北日報の方から是非協會の事を書いて呉れと頼まれました。斷るのも穏當でないと思ひましたので、少し潜越でしたが、初めからの事を七回に亘つて書きました。新聞紙は別便を以て御送りいたしましたから御覽下さいませ。豫め私と現在の協會との關係を述べて責任者としてではない事を斷つておきましたが、若し間違つて居る所がありましたらお許し下さい。

私の其原稿は、三四日過ぎてから桑港の日米に轉載されてゐるさうです。日米といへば在米の邦字新聞の中では一番勢力のある大新聞なのですがそれならも少し落着いて丁寧に書くのであつたのにと思ひましたが、もう追付きません。御許し下さい。

こちでも協會の事は實によく知られてゐます。

てゐる。其ミ市の女子大學を卒業して、セントポールの公立圖書館に勤めて居たが、さすが新英州の教養ある法律家の娘の事とて現代のあらゆる問題に興味を有ち　所謂眼覺めた、聰明な快活なそしてかなり常識を備へた女であつた。ふとしたはづみに醫師ケニコットと結婚してゴーファー、プレヤリと稱するある田舍の市に居住する事となる。これはキヤロルが豫て都市改善の理想があつて、大都會よりも田舍の淳朴を愛し、自分の理想を實現するには田舍の方が容易だとばかり想像して居た所へ丁度今後の時代は科學が世を救ふとの考も手傳つて、折から田舍から上京中の醫師濟生の科學者都市改善の理想、婦人として正に好適な天職と、こう聯想が夫から夫へと動いたのであつた。

ゴーファー・プレヤーには幻滅が待つて居る。米國西部の所謂プレヤリと稱する大荒野の一部に散在する一都會として、市とは自稱するけれど實は一本筋の本通りの外りは、何等視るべきものもなく田舍町の常として、住民の話題に上るのは農作の好惡位が關の山、日々隣同志の會合に日を暮して、未だに珍らしい事としては汽車の發着の度度に停車場で仕入れて來る外界の噂さ位であつた素より他國者のキヤロルが市廳舍の醜惡を訴へても、學校の不備を唱へても、救濟事業の急を叫んでも、土地自慢の商人共に手答がない。この狹い天地に唯一つサナトプシス倶樂部とて、婦人の文化修養を目的とするある會のあるのを頼りに、此會員なら少しは自分を理解して呉れるかと思ふと、是亦、中流無能者流の團體とて、キヤロルを過激派扱ひにする。キヤロルが唱道する樣な職業紹介所や、嬰兒健康診斷所や、市營住宅建設案などは、結構に

日本の新聞や雜誌に出たものは、何でも此處まで傳はつて來てゐます。全く驚く程です。

私の此度の記事も大分影響を與へたさうですが、こんな事を見聞きすると、新婦人協會といふものゝ責任の重さを思ひます。

私が來る前も來てからも『所謂新らしい女』といふので、少し評判だつたさうです。所が會つてみて、ぞんがいその平凡なのに、さうして色が眞黑で――アメリカの水で顏を洗つてから少し白くなりましたが――ゴツ／＼してゐるのに驚いてゐるやうです。

然し『所戰新らしい女』の爲めには大分寃をそゝいでゐますから御喜び下さい。

去る二十四日ワシントンホテルで高見之通氏にあひました。氏には第四十四議會の際、婦人參政權の請願の紹介をしていたゞきましたし、又治警の貴族院にかゝつてゐる際に運動していたゞいたりしましたので、その來沙を幸に御目にかゝり、此度の議會での御盡力を御願ひして置きました。

尚來る時船の中で武藤金吉氏にもあひ、矢張此の方の盡力を御願ひしておきました。

兎も角やりかけた以上、あすこまでこぎつけてゐるのですから、氣抜けをせずに、此度の四十五議會はうまく策戰計劃をたてゝ成功なさる樣、私からも御願致します。

『議會の時だけ返つたらどうか』

は違ひないが、我々の關係した事ではないと誰應ずるものもなく、されぱとて、會員の一人もキーツやロセッチは聞いた事もなく、スウインバーンは牧師さんから不道德家と聞てゐるので、そんな事を研究する必要はないと眞向からキャロルを攻擊する始末。其内にキャロル等の主唱で市廳の二階を借りて素人演劇を催す。これには農村の最も高尙な娛樂を供給する積りで、ショウか何かをかける計畫の處、是亦道德學者流の爲にマンマと打壞されて了い下品な新約音に込の笑劇をとの案が勝を制して、夫すら役者の我儘から散々失敗を招いて了ふ。

キャロルには自分の家からなほしてかゝられぱならぬとの勇氣があつた。家具や裝飾を革命的に變更して了つた。しかし夫の無趣味蠻カラは直し樣がない。每夕の閑を見て、英詩を一緒に讀まうと提議して見た。夫の迷惑な樣子を見て一二回以上續ける勇氣が挫けて了ふ。それでも一時は夫のケニコットが、雪の日も風の夜も病氣廻りの熱心と親切とには窃かに動かされる。特に或冬の日に折り妻と共に遊びに出掛けた自働車を、途中から急に數町郊外の農家へ廻して、腕切斷の手術を施したなりなどは、自分も親しくこれを手傳つて眞に科學の偉大なさへ感ずる。けれど夫の父母が田舍から出て來て滯在する事になつてからは徐心の寂寥を癒し難い。キャロルが親しくした人々の内に瑞西人の勞働者があつた。奇人として人が相手にしない。彼の小屋を訪れて其社會主義的言葉に共鳴するのはキャロル計りだ。夫の職業からキャロルがよく出入する藥屋に獨身者がゐる。彼とは多少趣味があふ。けれど世間が鵜の眼鷹の眼でキャロルの一擧一動を監視してゐるので、何も出

と高見氏と笑ひ合ひましたが、今はその時も金もありませんから、遙かにこちらから御成功を祈つて居ります。

私は五六日前から白人の家庭へスクールガールに這入つて居ります。朝晩だけ食事の手傳ひをして、日中は人を訪問したり、讀書をしたり方々視ていゝ事だけあげれば、生活費が費らないで、言葉が練習が出來、白人の家庭の樣子が判り、自分の勉強も出來るといふものです。

こゝもあと暫くで他へかはるつもりで居ります。同じゐるにも多くの家庭を見た方がいゝので、尚スクールガールだけでなしに、これを手始めに色々な仕事に、色々な方面に這入り込まうと思つてゐます。學校もグラムマースクールにも、ハイスクールにも、カレーヂにも這入つて見やうと思つてゐます。

一流のホテルにとまつて自働車で馳け廻つてあるくより、或は學校の寄宿舍や敎會等の中ばかりを通つてあるくより、私の行きかたの方が、遙に得る所が多いと、やせ我慢ばかりでなしに、眞個にさう確信してゐます。

然しそれは働く事がきらいでは、又お品をつくつて高くとまつてゐるのでは、さうして金が澤山あるのでは出來ませんが、幸、私にはそれが進んで出來るやうに惠まれてゐます。

當地にはあと一ケ月位、長くて二ケ月位でイー

來ない。此等の人々の外にキャロルは不幸の持つて行き所がないその内に長男ヒューズが生れる。いつさはなしに夫に對する愛が彼の上に移され、結婚後五六年するうちに、夫と別室に息む習慣を養つて了つた。こうなるとお互に感情の疎隔を來して、夫のケニコットは人妻さ特に親しくしたりキャロルは其頃仕立屋に住込んだ、生白い都會風をした靑年を愛したりする。夫婦室を異にして息む習慣は米國では近頃盛になりつゝあるので、又他人が其妻を愛したからとて殊更嫉妬を起すゆわれもない。妻は自分の專有物品ではない。人間らしく取扱へ。ショウなごを讀んだ者ならそうした態度を採るに違ひない。しかしゴーフアー、プレヤリの狹い天地では忽ち評判となつた。

其頃新任の若い女敎師が小學に來たが、生徒のサイ、ポカートといふ不良少年に、ある舞踏會のなり酒をすゝめられ、それを斷つたのみか、泥醉したサイを家迄送り屆けた。その親切が仇さなつて、却つてあらぬ噂さを立てられ、サイのお袋なる寡婦は自分が信神の凝固りである上に、息子程正しい者はないさ信じ切つてゐるのでたまらない。敎師が却てサイを誘惑したと言出し、敎師の方でも豫て田舍の遍狹に苦んでゐたのでそれ切り辭職して歸つて了つた。そんな事件があつた後は少し愼めばよかつたのに、キャロルが或夜仕立屋の若者に誘ひ出されて散歩したのが運のつき、彼等が道傍に休んでゐるのを、折から病家から歸りの夫に見付けられ、自働車に乘せられて歸宅する。キャヒルは車中既に決心してゐた。若者さの關係を一切打明けて了はうと。家に着くが否や夫に先手を打つた。あんな若い者さ噂さ迄立てられてどうする積

ストかサウスの方へ行き度いと思つてゐます。
　太平洋會議の際、萬國婦人大會があり、その示威運動があるときゝますと、ニューヨーク迄見に行き度いやうな氣がしますが、此度はまあ行かれないでせう。
　それは兎も角、なるべく早くチカゴに行き度いと思ひますが、冬が寒いさうですから、私の體の爲めには、も一冬位氣候のいゝ所にゐた方がいゝかとも思つてゐます。さうなると冬中サウスにゐやうかとも考へてゐます。
　まだよく決定して居りません。
　當地の物價の安いのに驚きます。日本の金にして牛乳が二合十二錢、パンが一斤二十錢、砂糖が一斤十八錢位です。
　洋服も随分安く、本場だけに素的にいゝのがあります。靴は五弗出せば充分ですし、サージのスーツだつて二十五弗も出せば上等です。
　此間ボンマーシエといふデパートメント、ストアの安賣に行きましたが、靴が一弗、木綿のハウスドレスが九十五仙、オール、ウールのオーバー、セーターが二弗九十五仙、コーセット一弗五十仙位でした。それで物は皆可成上等なのでした。
　洋服は今、平塚さんや私が着てゐたスーツのコートのやうな襟になつたのが流行ります――尤も前の布はとつて頸の所にレースをつけるのですが。それからスカーツは日本の袴のやうに折り目のあるのが流行です。
　私は矢張日本で着てゐた一張羅のスーツを少しなほして、訪問の時に着てあるいてゐます。

りか夜逃げでもして後捨てられる積りか。彼がどんな約束をするか知らないが、未成の事實をあてには出來ぬ。それよりか自分はお前なしに生きて生かれぬのだと。
若者は土地を去つて了つた。彼のおやぢがある日吐鳴り込んだりする。丁度歐洲戰爭が初まつて、男は出征し、女は種々な戰時事業にたづさはる。淺薄な愛國論が流行する。此町から出たとて町民の自慢になつてゐるプレストーハンといふ金滿家が、常は東部に住んでゐるが華府へ出て、戰時國家の樞機に參與する無給の官吏となつた。其人が休養の爲に故郷を訪づれるので、キャロルはこゝぞ好機會と、色好みらしい此老人を自說に說き付けて、社會事業の資を得樣とする。是亦意外の俗物であつて、其話に乘らない。
キャロルが常に眼をかけて居た例の社會主義の勞働者は、其後同國人なるキャロルの下婢と結婚して段々事業を擴げた。彼の妻子がチブスで危篤なとき、宗教團體を代表した二三婦人が訪問したのを、普段は無神論者などゝ人の陰口をたゝいておきながら、今は慈善家顔をするのが癪に障るさて門前拂ひを食はしたのが評判となり、其妻子の葬式にも隣人等は會葬せず、やがて獨探呼ばわりして彼を市から追ひ出して了つた。
友を失ひ、失望を重ねた、キャロルは暫らく夫を離れ、ヒューズ一人を連れて華府へ行くのである。表向は戰時の仕事を都會でして來るのであるが實は一時結婚生活を離れて、自己を磨かんさするノラの心であつた。是迄と生活が變つて見ると、女は朝から晩まで高等下女となつて家事にいそしむよりは、都會の下宿生活の

私は今、私自身の現在を喜んでゐます。從つて私に此の機會を與へて呉れた總てのものに感謝して居ります。

たとへ足らなくとも、自分の信じた事を自分のベストを盡してさうして與へられたものなら、いつでも何でも喜んで受けませう――やがては自分の欲するものが與へられるであらうとの確信を持つて。

私は今、日本にゐた時よりもずつと健康になつて愉快になりました。さうして何にも思ひわづらふ事なしに、自分の仕事に努力してゐます。こんな生活が一二年續いたら、きつと肥えられるだらうと思ひます。

どうぞ御安心下さいませ。

多忙な體で御座いますから、用事のない時は、皆さんへの御通信も大低失禮するだらうと思ひます

然しいたゞくのはかまひませんが――其も私への御注意とか、御意見とか、或は日本の婦人界なり勞働運動なりの御通信なら、御願ひ致し度い方です

又何か御用がありましたら何誰でも遠慮なく仰有つて下さいませ。尤もあんまり面倒な事ですと御役に立ちにくいかも知れませんが、それは私の方も遠慮せずに申上げます。

私の住所は時々變りますから一々御知らせする事が出來ませんが、左記のアドレスでいたゞけばいつでも私の手許に屆きます。（八月三十日夜）

F. Ichikawa
302 2nd Ave. So.
Seattle Wash. U. S. A.

方が近所の噂もなく、結句氣樂に暮せる事を見出す。その內に夫がやつて來て、數日を再びハネムーンが來た如くに費やすと、一寸歸りたい樣な氣にもなる。しかし仕事の都合が甘くつかず、尚ほ數ヶ月を暮す中に都會の空虛にも厭氣がさすのと、自分の妊娠を感じたのとでキャロルは夫の家に歸つて來た。

今はゴーファー、プレヤリももと程に厭はしくなくこゝに子供の敎養を重な仕事としてやはりもとの平凡生活に投ずるのである。

ある日飮食の時に子供がお饒舌をするとてケニコットが叱ると、

キャロル「そんなに叱らないでも……まあ聞いて遣つて下さらないの。坊やは大變面白い事を言つてるぢやありませんか」

夫「エ、こりやどうしたんだい。坊のお饒舌を聞いて一生暮せと言ふのかい」

キ「それがどうしていけないんですの」

夫「第一、行儀といふものがあるからね。そろ／＼敎育を受け初めてもいゝ頃なんだからね」

キ「私なんかは坊やから却て敎育を受けて行儀を敎はりますわ」

夫「ウム、又ワシントンから輸入の新敎育法とでもいふのかね」

キ「そんなものかも知れませんが、あなたは子供だつて人間だ――つて事を御承知なんでせう」

夫「そりやそうさ。唯坊やに會話を專有されたくないのだ」

キ「無論ですとも。我々だつて機利はあります。しかし私は坊やを人間として育て上げたいのです。坊やだつて、我々同樣に考へがありますの、私は坊やが其考を、ゴフャー、プレヤリの考へ通りでなく、自由に發達させる樣に致したいばかりです。今後は私もあなたも坊やを所謂敎育するといふ間違を犯さぬ樣にするのが私の大事業なのです」云々。

こんな事で「本通り」は終つてゐる、『想家の失敗がこゝにも現はれて我々の悲哀を誘ふものがあるではないか、この婦人の一生はじり／＼と環境に壓迫された一生であつて個性が一種の墮落を餘儀なくされてゐる。しかしこれが多くの婦人の常であり、又ゴフャー、プレヤリは多くの町の代表である。さればさてなまじ現代の思潮に動かされて限りなき不滿を感ずるよりも、無知無能の爭鬪なき生涯を送る方が結句仕合せだとの退嬰的な態度は採り得られやうか。開拓者はいつの世にもなくて適はぬ貴き犧牲を拂ふ覺悟がなくてはならぬ。

新婦人協會々報

本部通信

お元氣で大正十一年をお迎への事と存じます。まづ年のはじめの御挨拶を述べさせて頂きませう、明けましておめで度うございます。

大分久し振りでこの通信の筆を執ります。新しく湧上る力やら、苦しかつた思ひ出やら、嬉しさやらなさけなさやらで全く感慨交々至ります。然し人生は闘ひだ、全ての人が闘つてゐるのだと思ふと又新しく元氣になつて來るのです。況して婦人運動はたゝかひなんです。私共は婦人運動がたゝかひでないやうな新社會を形造るまで闘はねばならないのです。汎ゆる婦人がその力を一つにして、新社會建設のためにつくすべきではないでせうか。どうぞ御協力下さい。

まづ協會の經營難のために九月以降雜誌を休刊しなければならなかつた事のお詫を申上げます。經濟は未だ可なり困難な狀態に在りますが、兎に角雜誌を再刊する事に決めました。會計は來月號で御報告いたしますが、今年こそ是非基礎を固めて力強く出直したいものです。もう一息この難關を漕拔けるまで、どうぞみなさんお力添下さいまし。

× × ×

今年こそ各地方に宣傳したいと思ひます。全國に在る會員、購讀者諸兄姉の御盡力に頼つて出掛けたいと思ひます。みなさんも亦、汎ゆる機會を利用して協會の趣旨を擴め、會員を殖やすために御活動下さい。協會はさしあたり有力な會員を増す事に依つて、其實力を大にする必要に迫られてゐます。今少し財政の整理がつきます迄、雜誌を書店に出す事を中止しますから(會員と直接購讀者に郵送するだけ)一人でも會員、購讀者が殖えますやうに特に御盡力頂き度うございます。そのために御入用な協會の宣言書や雜誌の見本は、御申越次第すぐにお送り申上げます。

會務部

本部常務員の御挨拶。

會計庶務部　宮本きみ子
編輯部　桐本まさを
研究部　奥むめお
代理部　塚本なか子

八月以降の新入會員諸氏

小尾千代子氏(山梨)武智美與子氏(愛媛)
中村賤子氏(東京)深見陽子氏(東京)
鹽瀨三郎氏(東京)田淵アイ子氏(下關)
伊藤芳子氏(神戸)吉村常寬氏(東京)
三枝つや子氏(山梨)田草川松代氏(甲府)
望月里子氏(甲府)磯部はま子氏(甲府)
小林みさを氏(甲府)米倉義文氏(山梨)
酒井花子氏(東京)上田兼氏(東京)
千葉鼓堂氏(東京)島田花枝氏(東京)
稻垣守克氏(東京)清瀨　氏(東京)
桂泉氏(東京)小股省一郎氏(東京)
川上八重子氏(熊本)奥野彥六氏(東京)
内山さく子氏(東京)

× × ×

會費の領收書——今年から會費、雜誌代の領收書を差上げる等にしましたから、もし屆きませんでしたら必ず、御一報下さい。なほ御送金は成たけ振替口座(東京五〇九〇〇)に願ひます。

事業部

◉今年も例に依つて、衆議院議員選擧法改正、治安警察法第五條修正、花柳病者結婚制限並に離婚請求に關する請願書を貴衆兩院に提出いたします。請願用紙は前年よりは一つと少く各百五拾枚宛刷りました。本年一月以來の入會者の有志の方々だけに記名調印して頂くことにしましたから左樣お含みおき下さい。「提出は一月上旬です」

◉なほ治警第五條修正の方は、法律改正案としても提出する運びになつてゐます。提出者は、政友會一宮房次郎氏、憲政會は小山松壽氏、國民黨は植原悅二郎氏、無所屬は松本君平氏の筈です。

◉愈々代理部を始めこの生産的事業の一に數へる事にしました。續々御注文下さいますので大喜びでをります、殊に書籍類の取次は出來るだけ御利用下さい。代理部の取扱品は卷末にあります。御一覽の上御用命を願ひます。

研究部

當分の間各部門の研究部員が一緒になつて研究會を續ける事にいたしました。そして少くも一ヶ月に一度は各方面の專門家に來て頂いて話を聞くことにしたいと思ひます。それの小さい集りの時は研究會で、大きく公開にします時は講演會になるわけです。

昨年の、下半期はいろ／＼とり込んでゐたために、豫定の研究會もお流れになりました。十月十四日午後六時より、神田明治會館に於て平和問題講演會をしました。講師は、

一、金子筑水氏

一、稻垣守克氏

一、吉野作造氏

大變寒さのきびしい夜でしたが、かなり盛會でした。一月の豫定としては、

兒童の自由畫に就いて　山本鼎氏

會場　時日未定

支部通信

近頃各支部よりの通信が途絶え勝ちになつて心淋しく存じます、みんなそれ／＼研究も仕事もしておいでになるのですから、今後は必ずお互ひに通信をし合ひませう。

◎大阪支部では關口氏の隱退後、原田氏は御良人の御病氣にて、山本氏は公務に御多忙にて、澁谷氏も御病氣といふ風にて、高安氏お一人であつたので大分御世話をかけました、殊にさういふ事情の下にて戀愛問題批判の講演會を開いて相當好成績を揚げて下さつたのは、殆んど高安氏一人のお骨折に依つたものであつて、全く感謝の外ありませんでした。なほみなさんもそれ／＼御盡力願へるやうになりつゝおありになりますから、嬉んでゐます。

戀愛問題批判講演會順序

開會の辭

戀愛の革命　本間久雄氏

戀愛は人間愛への道程と見る　奥むめお氏

戀愛と自由　賀川豐彦氏

戀愛に依つて誤られたる婦人問題　楫本まさを氏

思想上より見たる戀愛　廚川白村氏

閉會の辭

その收支計算表

收入之部

一、金	六八七、〇〇	聽講料
一、金	一一〇、〇〇	寄附金

內五拾圓宛廚川氏、賀川氏、五圓宛戸田氏、貝本氏）

合計七九七、〇〇

支出之部

一、金	一五八、八〇	公會堂使用料下足其他
一、金	五八、〇〇	聽講券六千枚ビラ二萬枚印刷代
一、金	四六、〇〇	立看板二十本代
一、金	一七、〇〇	ビラ折込料朝日每日一萬七千枚
一、金	二一三、八五	講師謝禮及旅費
一、金	三一、八〇	講師食事及委員手傳辨當代
一、金	五、〇〇	電報料
一、金	一三、一〇	講師交涉及當日汽車賃
一、金	二、五〇	自働車、講師送り
一、金	四三、五五	手傳人禮、雜費
合計	五八九、六〇	
差引	二〇七、四〇	

右殘金全部を本部基金に繰入れました。廚川氏賀川氏は謝禮として差上げたものを改めて御寄附下さいました。

大阪支部より

當方も計算が濟みまして報告書を御覽に入れます。手違ひや何やで非常に入費がかゝり僅かしか御送り出來ない事を殘念に存じますが、此方では非常な努力の結果でございますから無意味に消費して下さいませんやうに願ひます。……

そして支部の意見と致しましては、この際議會の運動を一年休み、專ら財政を整理し社會の信用を得るやう努力される事をお獎めしたいと存じます。女性同盟も奇踏位の雜誌にしましたら、又選行もよく、誌上で宣傳する事に主力をつくしたら如何でございませう。其外には民法の改正案を作る事に努力し、其上で外部への運動を開始されましては如何かと、これは差出がましうございますが支部幹事全體の意見でございます。雜誌の休刊のおことわりを印刷して三月頃迄延ばして、いゝ雜誌をお拵しらへになつたら如何かと思ひます。

寄贈雜誌

東方時論、我等、創造、文化、婦人世界、婦人の友、女學世界、家庭研究、女性日本人、社會政策時報、信友、勞働、新組織、婦人と新社會、婦人公論、岡山公論、星、內外教育評論、無我の愛、日本一、文化通報、丁酉倫理講演集、平民、住宅研究、教育評論、小亞之光、統計學雜誌、教育學術界、道友、學校教育、國本、國際聯盟、教育、世界の批判、工手の世、新興婦人、婦女新聞、國家及國家學、中央法律新聞、兒童教育、國論、婦人新報、社會及國家、鐵之研究、新民、中外新論、內觀、赤い鳥、心の花、關西婦人新聞、人と人、婦人畫報、性の研究

別れたる男女

梋本まさを

一

母の乳癌は何うしても手術しなければならないことになつて、彼女は病院に連れて行つて手術を受けることにした。

あとで考へると、彼女は自分ながら其時の緊張した氣持ちが恐ろしくさへ思はれた。

入院した日、院長は老いた母の懐中を披げて、左の乳の大きく盛り上つた固い癌を、上から無雑作に掴みながら、

『これや、大分日が經つてゐますな』

と言つた。

『はあ、五ヶ月になります』

と彼女は言つて、癌と氣付いた日にSといふ醫者に診察して貰つて、手術をすゝめられたが、成可く傷をつけないで治す方法があるならば、その方法を選び度いと思つて、M病院の沃度カルシームの注射をつづけてゐたことなど打明けた。

『おゝ、さうですか、併し外のことゝは異つて、癌は轉移するから危険です。一日も早く手術して了はなければ』

かう言つて、一寸威厳を示す爲めに怖い表情をして見せた。彼女はそれを和げる爲めに、

『えゝ、それや無論さうでした……』

かう言つて、にこ〳〵笑つた。而してその腹の中では、これや失敗つた。こんなに荒つぽく、づけ〳〵言ふ院長にいきなり診て貰うのではなかつた。さうでなくてさへ、死よりも怖れてゐる手術を、母親はこの院長の態度でなほ更ら慄え上るかも知れない、などゝ思つた。

『今日なさいますか、明日なさいますか？』

彼女がいたはるやうに母親の胸を掻き合はして寝臺から起してゐると、かうも又無雑作に訊いた

『さあ』

急性ちなことにかけては、誰には讓らないと自信してゐた彼女も、一寸まご付かずにはゐられなかつた。それは自分の心で決することではなく、母親の氣持ちを考へてやらねばならなかつた。

『では、明日にして頂きませうか？』

かう小聲に院長に答へた。

『あゝさうですか』

二人はかうして案內された二階の病室に入つて行つた。

そこは白い壁に劃られた八疊の一室で、二方には大きな硝子窓が付いてゐて、床には疊、寢室の代りに小高く蒲團を積んで寢床が作られてゐた。外觀が洋風で、內部は坐るやうになつてゐるのが、一寸彼女を不愉快にさせた。でも今更ら病院を代へることも出來なかつた。

『でもよく日が當つて好い』

など〻言ひながら、西洋風の頑丈な簞笥や、大きな鏡のついた鏡臺、小棚、火鉢などの何時でも一世帶持てるやうな道具の並んでゐるのを不思議さうにして、見て步いた。

『あの怖い院長さん』

母親はそんなことを言つて、紋のついた綿入羽織を脫いで、火鉢の前にどつかと坐つた。矢張り第一印象が惡かつたな、など〻彼女は思つたが、氣の付かない容子をして、

『でもあの人は、一時は大學敎授になる人だと評判された人ですよ、技術は確かだし、經驗も積んでゐるし』

とも言ひながら、紹介したS學士が學校で講義をきいてゐたのだから、もう五十位かな、など〻思つた。

そこに男衆は炭だの、火種だの、湯沸しや茶器などを運んで來てくれた。母に注意して、紙に包んだものをそつと握らせた。

『看護婦さんは何うします？』

『さあ、一人は友人が昔看護婦をやつた經驗があるので、その人を依賴みますから、もう一人一等の人を願へないでせうか？』

『え、ではさう電話をかけますから』

『その人は一週間位で澤山です、あとは友人と私とでやりますから』
『乳癌ですね、乳癌ならば、長くて三週間、早く治つて二週間、二人の看護婦を付ける必要もない位ですよ』
『まあ、此病院で治つた人がありますか？』
母親はわきから口を出した。
『えゝ、えゝ。お婆さんで治つた人が二人もあります。乳癌の手術が一番安全ですな』
男衆は一寸そこに坐りこんで、敷嶋を一本取出して吹かしながら、眼をぱちくりしてきいてゐる母親を擱まへて、頻りに効能書を並べたてた。母親は「うむ、うむ」と返事をしながら、さういふ先例もあるから大丈夫だらう、殊にその婆さんは六十七、自分は六十だから七つも若い、それだけでも安全でなくちやならないなどゝ腹の中で思つた。
彼女は外に出て、白い綿ネルや、紙や綿やいろいろな細かい買物をして歸つて來ると、夕方までに白綿ネルの寢卷を二枚母親と二人で仕立上げた。それが明日の手術臺に上る衣物だ、母親は折々顔を曇らせた。
その夜たのんでやつた友人のAはやつて來た。紋付の紫金紗の羽織に大島の袷といふやうな、如何にも醫者の妻君らしい風采をして、入つて來たのを見た彼女は、
『明日からは何かもつと粗末な風采をして來て貰へないでせうか、私なんぞ平素着でやつて來た』
少し皮肉だなと思ひながら、つけつけやつて見た。
『え、今日は一寸お見舞ですから、明日からは平素着にします。この大島はあなたに見て頂いてないから、一寸見せに來たんですの』
『大變によく似合ひますよ』
と母親は右の手で乳癌をおさへながら言つた。健康らしい白い肥つた顔、嬉しさうに、若い妻君らしく取りすましてゐるAと、手術で胸が充滿になつてゐる母親のしよんぼりとした格好とは、彼女はだまつて見てゐられなかつた。

二

其翌日、母親はとうとう手術を受けた。醫者の

方からは、心臓がひどく弱つてゐるから、全身痲醉はかけられない、局部注射で我慢して貰ひ度いと言はれたのを、母親は頻りに拒ばんだ。
『このまゝ死んでも好い、死んでも好いから全身痲醉にして下さい』
手術臺に上つてからも、母親は頻りにそれを言つた。
S醫學士が保證人といふ格で立合つて、彼女も手術室に入りこんだ、Aの外に病院で雇つた看護婦も母親の側に付添つてゐた。醫者は病院長の外に、三四人の助手と一人の女醫がついてゐた。その人達は硝子の背の高い手術臺に載せられた母親の周圍を取りまいて胸を披げたり、ぷくりと大きく高くふくれ上つた局部に消毒藥を塗布したりした。それにつゞいて、院長の手で局部注射の針が患部の周圍に幾本となくさゝれた。その度每に母親は、
『全身痲醉を、全身痲醉を』
と哀しげな聲を絞るやうにして言ひつゞけた。
彼女は極度に信賴してはゐながらも、少し慘酷なやうな氣がした。何とかもう少し意識を失つてやる方法がないものかと思つた。これは院長を選びぞこなつたかな、などゝ思ふと、心の底に一種の苦しい不安がちよく〳〵と頭を擡げた。それでも表面だけは平然と澄ましこんで、S學士の側に無言つて立つてゐた。病院長の大きな胴と、左の腕との直角をなした間から、母親のその患部はよく透けて見えた。彼女は果ては覗きこむやうにしてその長い脊丈けをかゞめて顏を突き出してゐた。
患部の注射が終ると、今度は氷のやうに尖る洋刀がきらりとするかと思ふと、それがざくりと小皺の倚つた肉の中に入りこんで、忽ちげり〳〵と乳房から三寸ばかりの乳の周圍を剜つて行つた。と思ふと母親は子供が眠りからさめたやうに、小さな悲鳴をあげると、
『いたい、全身痲醉、全身痲醉』
と言ひながら、兩の手も足もしつかりと男力で壓へ付けられてゐるのを撥ね返へさんばかりに足掻きはじめた。
彼女は思はず兩の手を握り締めて齒を嚙み合は

せた。

『半ば夢中ですがね。では全身痲醉を』

と院長は刀を使ひながら、向う側の助手に命じた。いひつけられたその人は機敏に立つて行つて直に器械を持つて來ると、自分でかけはじめた。而して患者の耳元で、

『ひとつ』

と醫者がいふと、

『ひとつ』

と患者も大きく慄え聲で眞似る。

『ふたつ』

『ふたつ』

『三つ』

『三つ』

その間に手術はづんづん進んで、癌の大きな固まりは、ぽつかりと剜りとられた。と見ると剜りとられたあとの肉のくぼみはまるで大きなどんぶりのやうな穴が出來てゐた。二三人の助手は敏捷にひとつひとつの血管に、銀色に光るピンセットを以て出血を壓へて行つた。その數多くのピンセットが、まるで氷柱の下がるやうにぶら下つてゐるのを見ると、悲慘を通り越して、ある壯觀な感じが彼女を襲つた。最初懷いてゐた不安は失なつて、次第に院長の技能にある信頼を覺えて行つておづとその手許を凝視した。すると院長のその大きな手は鋭利な鋏を握つてゐて、親癌の周圍につらなつてゐた小粒の癌をひとつひとつ摘みあげてはちよきちよきんと切つた。小粒の癌は黄色い脂肪にとりまかれた、大きな葡萄の實のやうに幾つとなく肉の間に出來てゐた。それをひとつ殘らず左の爪先きで探つては、右に持つた鋏で切りとつた。

その時に母親の痲醉は次第にふかくかゝつて行つて『四十五、四十六』などゝ無意識に呼んでゐた。と思ふと、不意に鋏を又あの大きな洋刀に持ちかへた院長の手は、傷口の一角からぐさりと肉に刺されて、次第に左の腋下の方へと裂き破つて行くのであつた。流石に彼女もそれを見て冷やりとせずにはゐられなかつた。

『おゝ、非常なものだ』

と院長は言つた。その言葉で、轉移した癌の小

さなのが、幾つとなく連らなつてゐるのを想像して、そこでもまた水を浴びるやうな恐怖の背中に通つて行くのを覺えた。

そこは院長の大きな軀にさまたげられて見えなかつたけれども、頻りに腕を動かせてゐるのを見ると、小粒の癌のとり出されてゐることは明瞭であつた。

無言つて、唾をのみこんでゐたS學士は、彼女から離れて院長の背後から覗きこんでゐた。助手の手は又血管をとめるピンセットを挾むことに動いた。

それが終ると、傷口は幾度か純白なガーゼで拭はれて、直ちに縫合に移つた。多くの人の手は敏捷にはたらいて、そのピンセントはひとつひとつ外されて、それが森とした手術場に、ちやりん、ちやりんと鳴つた。いかにも規則立つた忩しさが人々の動作の上に現はれた。もう透間から彼女は覗くことは出來なくなつた。

と思ふと、院長はくるりとこちらを向いて、

『よく御辛棒でしたな』

と言つてにこりとした。思はず彼女は頭を下げた。

『有難う御座いました』

『イヤ』

かう言ひながら、S學士と彼女の前に剜りとつた乳房を示しながら、

『立派な癌です。實に大きなものです』

『小さい奴も隨分でしたな』

とS學士は言つた。

『悉くとつた意りですが、どんな小さなものが殘つてゐるか、それは分りませんからね、まあ、再發しないやうにあり度いものです』

と言つた時には、今の今まで涙ぐむほど信頼してゐた院長に對して、思はず眼を瞬つて見なければならなかつた。

『それは無論です。何うもそれは仕方がありませんから』

S學士は調子を合はした。

彼女は不思議な氣がした。肉眼で見ても分らないやうなたゞ一粒の、いな一つの細胞が殘つてゐ

ても、それが次第に脂肪を營養として細胞が發育してゆくのが癌の性質だと、ある專門醫からきかされた、その先入主が、その時も頻りにはたらいて、「どんな小さい者が殘つてゐるか分らない」やうな暢氣な手術をされて何うなるだらうと思はずにゐられなかつた。

けれども今はそんなことを質問してゐられる場合でなかつた。續いて人々がその傷口に繃帶をかけてゐる方に氣をとられて、彼女は院長からそつとのがれて、そつちの方へと歩いて行つた。

『さあ、濟みましたよ』

などゝその醫員の一人は言つた。手術室はあけ放たれて、すつかり昏睡狀體に入りきつた患者は軈て擔架に移されて、病室に運び入れられた。見送つてゐた院長はその側に進んで行つて、靜かに脈をとつて見た。

つゞいて、新しい不安が又彼女にはやつて來た黃色に、血の氣の失せた、寂しいとも何とも言ひやうのない顏をして、眼も口も固く閉じたまゝで眠つてゐる、その眠りが頓て激しい痛みの爲めにより醒まされはしないだらうかといふ不安が、頓て彼女の胸をいつぱいにした。病室に入つて來ると、

『まあ、無事で結構でした』

S學士はもう一度脈をとつてから、さう言つて彼女の方に向き直つた。

三

秋らしい、よく晴れた日がやつて來た。硝子窓からは藍色の美しい空が見えて、鮮やかな日光が病室の隅々までもくつきりと照らした。

病人は白い毛布に埋くまつて、頻りによく眠つた。熱は三十八度から九度までの間を往來した。それが彼女の不安を去らしめなかつた。

彼女は看護婦二人の形式的な、規則づくめな看護の仕方が不愉快で、又しても醫員室に入つて、容態についての注意をきゝに行つた。それに母親の常習便秘は、その時も甚くなつて、それには一しきり苦しめられた。けれども外科專門の病院では、さういふ手當すら緩慢で見てゐられなかつた

『やつぱり、かういふ內科のことになると、專門

醫者はだめだわね、內科外科共にあるところへ行けばよかつたな』

など〻Aに言つて、仕方なく彼女はS學士の許まで、いつも母親が服みつけてゐる緩下劑を貰ひに行つた。

そのついでに、郊外の自家の容子を見て來やうと思つて、藥の袋を抱へながら歸つてゆくと、留守をしてゐた姉はとんで出て迎へた。

『まあ、おつかさんどう？ 今日は見舞にゆかうと思つてゐた』

『便秘が甚くつて、熱が下らないのぢやないかとも思ひますの』

『熱が下りませんか、困りますね』

一寸上つてゆかうと思つて、坐敷に通ると、其處も此處も戶がぴつたりと閉められて、机の上の本だの棚の上に飾つてあつたものなどが悉く納ひこめられてゐるのが、まるで空家に來たやうな淋しさを誘つた。

『一寸まつて下さい、お茶でも淹れますからね』

と姉は立つて雨戶をあけたり、火鉢を運んで來たりした。

『手紙は來てゐますか』

『え〻二三枚』

かう言つて小抽斗から取り出したのを見ると、その中の端書の一枚は、Kから倚來したものであつた。丁度九州の大演習に從いて行つてゐたのでその旅行の感想が簡單に記してあつた。H新聞を見れば、その通信記事が載つてゐるだらうとは思つてゐたが、さういふ餘裕もなしにこの一週間を過してゐたことが、明晰りと顧みられた。

彼女はその端書を讀み讀み、開けられた椽側に立つて見ると、コスモスが秋の日に輝やくやうに咲き亂れてゐた。母親が丹成して育てた小草も薄紫の花を付けて搖らいでゐた。庭のむかふは空地で、そこには雜草が半ば、黃色くうら枯れて、蹈みくだかれたやうに伏しなびいてゐた。積みこんだ材木が肌をあらはに出して、秋の日にさらされてゐるのが、一層寂しさを誘つた。そればかりではなかつた、むかうにくつきりと見える杉の森、なだらかな傾斜をなした丘陵、すべてが秋の色に

包まれてゐるのが、その空地の雜草を越して、くつきりと見渡された。
『武藏野の秋は長い』と病院に行く前に母親が言つてきかしたことなどが、靜かに彼女の胸に來た
茶を運んで來た姉は、はじめて自分もそこに落付いて坐つて、
『御近所の方から頻りに見舞を言つて下さるもんで挨拶に困つて了つた、あなた歸りがけに一寸倚つて行つて下さる？』
など〻言つたが、彼女はそれを怒るやうにして拒んだ。
『それ位なことは、あなたが引うけて下さらなくつちや』
など〻つい尖つた聲を出した。彼女にはそこにも落付いた自分が見出せないやうな氣がした。と言つたとて、病院のあの一室に、二人の看護婦と自分と睨めくらべをやつてゐても、それで何うなるわけのものではないやうな氣がした。
何が何だか、すべてのことが焦燥と頭にやつて來て、親の容體もひとつ〱細かく姉にきかせてをれない、餘裕のない自分が淺ましく思はれたりした。
『でも大丈夫ですね』
『え、死ぬことはないでせうね、でもあの癌がどの程度まできれいにとり盡せたかは疑問ですね』
『さう』
『でもどこの手術でも、然う言つたものらしいのね』
『然うですかね』
かう言つて、姉は溜息をついだ。
『私はそんな馬鹿なことはない、肉眼で見えないなら見えるやうな方法でやつて行くのが本當だと思ふけれども、仕方がないのね』
『成程ね』
順しい姉は、それだけしか答へられなかつた。

四

彼女は、小石川のKの家に、母親の入院したこと〻、容體とを簡單に記いた端書を、歸途にほうりこんだことを思ひ出した。その端書には、大演習から歸つたらば、直に病院へやつて來て貰ひ度

いとかき加へた。さうまで言つて、親しげな容子を見せることは今後の二人の仲に、ある危險を豫想出來ないわけでもなかつたが、でも今の場合Kの見舞つてくれることは、せめてもの慰めでもあるやうな氣がした。

四五ヶ月まへまでは、良人として、妻として、どんな小さな家事の出來事でも、お互ひに相談してやつて來たものが、かうした大きな事件に就いても、行先きも分らずに、その留守宅にぼんやりと言ひ送つてやらねばならないやうな今の境遇が流石に彼女には心細く思はれたりした。彼女の胸には、あの結婚生活の七年間の長い〳〵間の出來事が、なほ今でも連續してゐるやうな氣がするかと思ふと、時には、遠い〳〵夢のやうな過去に思はれたりした。

『別れてからも、兄弟のやうに親しく、淸い仲でゐませう』

かう言つて、理解の上で別れて來た二人ではあつたけれども、でもその言葉の上に現はれたやうな美しい氣持ちでゐられるか何うかは疑問でなければならなかつた。

『Mが獨身で徹すのなら、僕も獨身で徹すつもりですから』

などゝKが姉に言つたといふ言葉を、彼女がきいた時も、不思議な氣がした。なぜなら、それほどの誠實があるなら、なぜ彼女自身の生活のすべてを默許する寛大さがないだらうかと思つた。

『お前が創作をやるのなら、是非別居に限るね、その方がお前も德だ。お前はからだが虛弱だから郊外生活が好い、俺はこの記者でゐる間、市內から一歩も外には出られない』

かう言つて、彼女の生活上の便宜は何ひとつ叶へては呉れなかつた。それが別れてゆく原因の大部分だつた。それにお互に懷いてゐる思想の甚だしく距離のあるのも否めなかつた。世間的に、世間的に、と進んでゆくKは、彼女の性格から來る沒世間的な、孤獨な道に歩んでゆかうとする態度が、甚だしく鼻についた。

『實社會を離れて、人間らしい生活があるか、世間見ずが』

など〻言つて、二言めには彼女を罵つた。幾度かのがれて行かうとして、幾度か失敗したことが數多く彼女の胸に思ひ出された。仕舞には、

『出て行つてくれ。お前のやうな性格の女で、さうした目的のある女は、全く耐らないからな』

などゝいふ氣力もKには失なはれて仕舞うやうな日がやつて來た。

『では、何うしても意思が合はないから、出てゆくに定めましたよ』

などゝ彼女が言つても、

『うむ……』

と言つて、取り合はなかつた。

彼女には又、自分の與へられた道で滿足の出來ない、放縱な、わが儘な生活も顧みられなくはなかつたが、Kの燃燒し盡した、もみがらのやうな愛が耐らなく淋しかつた。それに酒量は次第に增して、夜歸らぬやうなことは屢々あつた。

階下で、母親がはら／＼するやうな喧嘩がその度に起こつた。

『もうあなたの冷たい心は十分に解つたから、これで澤山です、明日か明後日には出て行つて了ひますから』

などゝ彼女が例の病氣を起こすと、Kは、

『へえん。いかやうにも』

などゝ取りすまして、構ひつけなかつた。けれども別れ際には、然うした嵐もお互ひに飽きて、むきになつてやつて見る勇氣さへなくなつて了つた。

氣の小さな、僅かなことでむきになるやうな母親のその病氣は、かうした草臥れたやうな夫婦仲を引裂くに十分な力があつた。Kと別れたらば、母親は少しは落付くだらう、さうすれば病氣の靜養を妨ぐる原因もなくなるわけだ、などゝ思つた。母親は惡液質からくるその病氣の惱みになやまされて、Kの一擧一動に腹をたてた。

さうした巴渦くやうな空氣の中では、靜かに心をおちつけて書く氣持ちにもなれなかつた。折角乘り出したからには、二三年以前から計劃してゐたあの長篇に手を付け度いと思ふ慾望で、焦慮としてゐた彼女は、一日も早くこの家庭を破壞したら救はれる道があるやうに思はれずにはゐられなかつた。

さうして可なりな努力で別れて了つた今となると、矢張りどことなく心の淋しさはあつた。Kが大演習から歸つて、病院に訪ねて來るのを、輕い意味で待つやうな日がつゞいた。(未完)

原稿募集

論文　十五枚位（四百字詰）
時事批判　長短隨意
創作　二十枚位（同　前）
感想文、詩歌、その他
飜譯など

締切　毎月十日

なほ雜誌の内容や形式に就いてどし／＼御批評を願ひます
宛名は協會内編輯部へ

編輯だより

▲編輯は一月號より桐本まさを氏におゆづりする筈でしたが、同氏が病氣になつてしまはれたものですから私が代りをしましたわけです。二月號からは氏の理想的に、婦人雜誌界でも誇るに足るいゝものにしたいと意氣込んでゐられますから、お互ひに萬事をまさを氏に任せていゝ雜誌を見られる日を樂しみにしませう。只一言おことわり旁々お願ひ申上げたい事は、私共では雜誌をもう少し内容豐富にしていろんな問題を取扱ひ、又いろんな方面に渡つて、いろんな人々の筆になつたものを以て中味を多くしたいと思ひますからみなさんもそれ／＼御得意なものを御寄稿下さるやうにお願ひ申上げます。この雜誌が婦人ばかりの手にて内容を整へる事が出來、これ迄知られなかつたすぐれたる婦人の方々を世に紹介することが出來たら、ほんとに幸です。（む）

定價表

一部	金三十錢（郵税五厘）
半ヶ年	金一圓七十錢（郵税共）
一ヶ年	金三圓三十錢（郵税共）

廣告料

特等　一頁	四十圓
一等　一頁	三十圓
二等　一頁	二十圓
半頁	十圓

四回以上割引あり

注意

▼御注文は總て前金で願ひます。
▼御送金は振替に御拂込み下さい
▼郵券代用の際は一割增の事（五厘切手にて）
▼誌代の領收書は別にお送りいたします。

大正十年十二月卅日納本
大正十一年一月一日發行（第十二號）

編輯兼發行印刷人　奥むめを
東京市麹町區内幸町一ノ六
發行所　新婦人協會
電話銀座三九二二番
振替東京五〇九〇〇番

賣捌所　當分直接販賣だけ

新婦人協會代理部開始

かねて計畫中であつた代理部を始めました。協會の資金の一助にしたいと思ひますから、出來るだけこれを利用して頂き度う存じます。現在は左に掲げる品々だけですが、追々擴張してゆく筈です。御注文は總て前金にてお願ひいたします。御申込次第敏速に御郵送申上げます。申上げる迄もありませんが、取扱品は總て當方にて責任をもつて信用あるものだけに限ります。

圖書雜誌類取次販賣

如何なる種類の圖書雜誌でも、御希望に應じて取次をいたします。書籍をお需めになる時は、成たけこの機關を通じてお買求め下さるやうに、又廣くお知り合ひ方々にも御吹聽下さるやうお願ひいたします。定價に送料を添えてお申込下されば直ちにお送りいたします。

其他、參考書、新刊書等に就いての御相談に應じます。これは往復ハガキ又は返信料封入にて願ひます。

メリヤス、織物、つくろひ機械

專賣特許 **エンゼルハンドルーム** 定價金一圓 送料一個五錢

私共が日常使用してゐる靴下、莫大小、ジャケツ、毛絹綿製品は容易に破損し易く體裁よく修理する事も困難でしたが、それらの修理機械エンゼルハンドルームは使用法は至つて簡易で、品質堅牢體裁優美携帶にも至極便利です。

地球に向ひ獅子印 **各種織物用防水液** 定價別表 送料八錢

防水液を加工しても其の質を傷めず、光澤を失はず手觸りも決して變らぬといふので、近來非常に需要を增して來ました。和洋服、コート、袴、洋傘、風呂敷國旗足袋其他如何なる布帛にもお薦めいたします。至つて手輕に出來ます。

	一升解き分	二升解き分	五升解き分
木綿及絹織物用（甲）	九十錢	二圓四十錢	三圓五十錢
毛織物及毛綿交織物用（乙）	八十錢	二圓十錢	三圓

御國火熨斗、大正火熨斗 定價 御國四圓 大正四圓五十錢

火袋の內部は陶製の二重壁で火熱の放散を防ぐと共に巧妙堅牢な通風裝置で火加減の强弱は自由自在それに一度入れた火は決して消えることなく僅かの炭火で存分の火伸しが出來ます、其他底部には傳熱力を强める仕掛があるなど總てが理學的に完全な新發明品であります、其著しい特徴左の如し。

▲保温力の偉大な事
▲使用中絕對に火の消えない事
▲火力を任意に調節し得る事
▲此少の炭火で十分役立つ事
▲體裁優美其上極めて堅牢な事
▲アイロンに優りて使用輕便な事
▲毛織物でも容易にひのし得る事

家庭重寶 **ポルピーク** 定價金三十錢 送料五錢

アルミニユーム、ホーロー燒、瀨戶引、銅鐵眞鍮錫、金盥、バケツ等金屬製器具類の穴あき、漏りを修覆する藥品です。

眞琴商會特製 **マルセール石鹼** 定價金三十五錢 送料五錢

絹地、毛織物の洗濯に布地を傷めず特効あるマルセール石鹼。

理想的衞生優等 **ロンドン齒磨粉** 定價一袋金十錢 一打金一圓

羅紗製スリツパ 定價一足金六十錢 半打以上割引します

隔月一回發行
全紙面アート紙

星

第十一號
一月號

□定價貳拾錢
□送料貳錢

繪　山澤榮子
トラヒストの寫眞一枚
其他　奥村伊佐子
高岡成子


寒い冬の夜も樂しい御家庭からは
いつも明るい光が溢れて居ります
登録
標
マツダ瓦斯入電球
マツダ
TEC
神奈川縣川崎町
東京電氣株式會社
出張所
東京、大阪、門司、名古屋、仙臺、札幌、
大連、上海、福岡、金澤、臺北、京城

大正十一年一月一日發行
大正十年十二月廿日印刷納本
女性同盟一月號
（大正九年十月一日第三種郵便物認可）

